

42638

教科書文庫

4

810

51-1938

200030

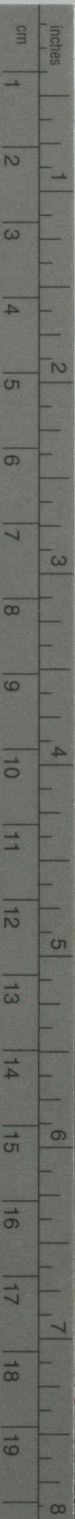
1912

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

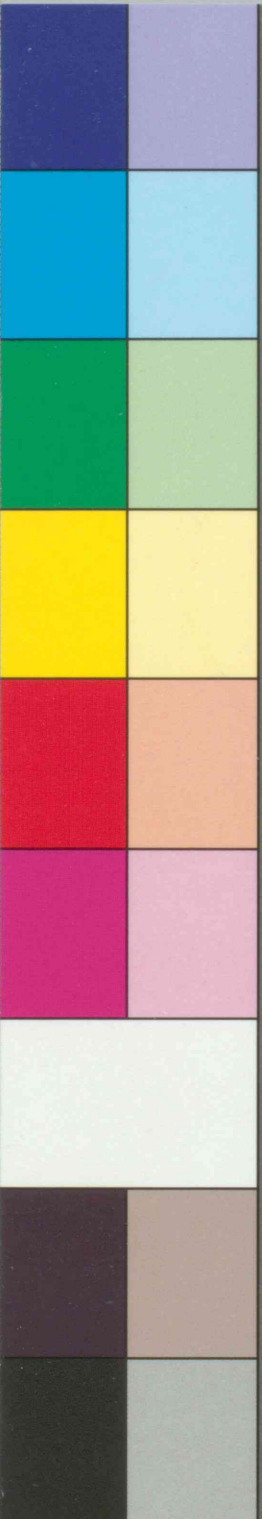
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



375.9  
Y019  
資料室

師範國文

第一部用卷九



資料室

371.9  
Y019

文部省檢定濟

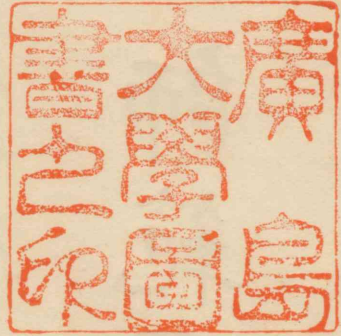
昭和三十二年三月十五日 師範學校國語教科用科

吉田彌平編  
石井庄司補訂

師範國文 第一部用 卷九

\*\*\*\*\*  
修正再版  
\*\*\*\*\*

東京 光風館藏版



師範國文 第一部用 卷九

目次

✓一	忠君愛國	〔文部省〕國體の本義	一
二	國文學の精神	久松潜	一二
✓三	草枕	夏目漱石	三
✓四	幻住庵の記	松尾芭蕉	五
五	猿蓑鈔	幸田露伴	四
六	比良の山風	〔新古今和歌集〕	五
七	かぐや姫	〔竹取物語〕	五
八	土佐日記鈔	紀貫之	七

目次

一

	出立ち	七
	海の上	七四
	都入り	八七
九	うたひもの	八一
	神樂	八一
	催馬樂	八二
	今様	八三
	朗詠	八四
✓ 一〇	雪の山	清少納言 八五
✓ 一一	須磨	紫式部 九四
一二	愚禿親鸞	西田幾多郎 一〇〇
✓ 一三	おもかげ	一〇五

	一枚起請文	法然 一〇五
	學道	道元 一〇六
	念佛	親鸞 一〇七
	土牢御書	日蓮 一〇九
一四	大人と子供	相馬御風 一一
一五	子供の文學	松村武雄 二七
一六	全人としてのペスタロッチ	小西重直 二七
一七	日本文化の優秀性	鹿子木員信 二七

目次終

師範國文 第一部用 卷九



一 忠君愛國

我が國は、天照大神の御子孫であらせられる天皇を中心として成り立つてをり、我等の祖先及び我等は、その生命と活動の源を常に天皇に仰ぎ奉るのである。それ故に天皇に奉仕し、天皇の大御心を奉體することは、我等の歴史的生命を今に生かす所以であり、こゝに國民のすべての道德の根源がある。忠は、天皇を中心とし奉り、天皇に絶対隨順する道である。絶対隨順は、我を捨て私を去り、ひたすら天皇に奉仕することである。

この忠の道を行ずることが我等國民の唯一の生きる道であり、あらゆる力の源泉である。されば、天皇の御ために身命を捧げることは、所謂自己犠牲ではなくして、小我を捨てて大いなる御稜威に生き、國民としての眞生命を發揚する所以である。天皇と臣民との關係は、固より權力服從の人爲的關係ではなく、また封建道徳に於ける主従の關係の如きものでもない。それは分を通じて本源に立ち、分を全うして本源を顯すのである。天皇と臣民との關係を、單に支配服從權利義務の如き相對的關係と解する思想は、個人主義的思考に立脚して、すべてのものを對等な人格關係と見る合理主義的考へ方である。個人は、その發生の根本たる國家歴史に連なる存在であつて、本來それと一體をなしてゐる。然るにこの一體より個人のみを抽象し、この抽象

せられた個人を基本として、逆に國家を考へ又道徳を立てても、それは所詮本源を失つた抽象論に終るの外はない。

我が國にあつては、伊弉諾、尊伊弉冉、尊二尊は自然と神々との祖神であり、天皇は二尊より生まれました皇祖の神裔であらせられる。皇祖と天皇とは、御親子の關係にあらせられ、天皇と臣民との關係は、義は君臣にして情は父子である。この關係は、合理的義務的關係よりも更に根本的な本質關係であつて、こゝに忠の道の生ずる根據がある。個人主義的人格關係からいへば、我が國の君臣の關係は、没人格的關係と見えるであらう。併しそれは個人を至上とし、個人の思考を中心とした考、個人的抽象意識より生ずる誤に外ならぬ。我が君臣の關係は、決して君主と人民と相對立する如き淺き平面的關係ではなく、この對立を

義は君臣にして  
義は乃ち君臣な  
れども情は父子  
を兼ね  
(雄略天皇御遺  
詔中の御語、日  
本書紀)

絶した根本より發し、その根本を失はないところの沒我歸一の關係である。それは、個人主義的な考へ方を以てしては決して理解することの出来ないものである。我が國に於ては、肇國以來この大道が自ら發展してゐるのであつて、その臣民に於て現れた最も根源的なものが即ち忠の道である。こゝに忠の深遠な意義と尊き價値とが存する。近時、西洋の個人主義的思想の影響を受け、個人を本位とする考へ方が旺盛となつた。従つてこれとその本質を異にする我が忠の道の本旨は必ずしも徹底してゐない。即ち現時我が國に於て忠を説き、愛國を説くものも、西洋の個人主義合理主義に累せられ、動もすれば眞の意味を逸してゐる。私を立て、我に執し、個人に執著するがために生ずる精神の汚濁、知識の陰翳を祓ひ去つて、よく我等臣民本來の清

。体認

單なる知識  
 の体合  
 として認識する

明な心境に立ち歸り、以て忠の大義を體認しなければならぬ。天皇は、常に皇祖皇宗を祀り給ひ、萬民に率先して祖孫一體の實を示し、敬神崇祖の範を垂れ給ふのである。又我等臣民は、皇祖皇宗に仕へ奉つた臣民の子孫として、その祖先を崇敬し、その忠誠の志を継ぎ、これを現代に生かし、後代に傳へる。かくて敬神崇祖と忠の道とは全くその本を一にし、本來相離れぬ道である。かゝる一致は、獨り我が國に於てのみ見られるのであつて、こゝにも我が國體の尊き所以がある。敬神崇祖と忠の道との完全な一致は、又それらのものと愛國とが一となる所以である。抑、我が國は皇室を宗家とし奉り、天皇を古今に互る中心と仰ぐ君民一體の一大家族國家である。故に國家の繁榮に盡くすことは、即ち天皇の御榮えに奉仕するこ

とであり、天皇に忠を盡くし奉ることは、即ち國を愛し國の隆昌を圖ることに外ならぬ。忠君なくして愛國はなく、愛國なくして忠君はない。あらゆる愛國は、常に忠君の至情によつて貫かれ、すべての忠君は常に愛國の熱誠を伴つてゐる。固より外國に於ても愛國の精神は存する。然るにこの愛國は、我が國の如き忠君と根柢より一となり、又敬神崇祖と完全に一致するが如きものではない。

實に忠は我が臣民の根本の道であり、我が國民道德の基本である。我等は、忠によつて日本臣民となり、忠に於て生命を得、これにすべての道德の根源を見出す。これを我が國史に徴するに、忠君の精神は常に國民の心を一貫してゐる。戰國時代に於ける皇室の式微は、寔に畏れ多い極みであるが、併しこの時代に於

大伴家持

奈良時代の歌

旅人の子  
聖武・孝謙の兩朝に仕へ中納言・持節大將軍に任ぜられた

延暦四年(四四三)

卒年五十七

大來目

天津久米命の裔  
神武天皇の東征に従つて各地に轉戦し大功を立てた

大伴部

武部

ても、なほ英雄が事をなすに當つては、その尊皇の精神の認められない限り、人心を得ることは出来なかつた。織田信長・豊臣秀吉等がよく事功を奏するを得たことは、この間の消息を物語つてゐる。即ち如何なる場合にも、尊皇の精神は國民を動かす最も力強いものである。

萬葉集に見える大伴家持の歌には、

大伴の 遠つ神祖の その名をば 大來目主と おひも

ちて 仕へし官 海行かば 水漬くかばね 山行かば

草むすかばね 大皇の 邊にこそ死なめ かへりみは

せじと 言立て 後悔

とある。この歌は、古より我が國民胸奥の琴線に觸れ、今に傳誦せられてゐる。



橋諸兄

奈良朝の末頃の  
名臣  
世に井出左大臣  
といふ  
天平寶字元年（  
四七）卒  
年七十四

源實朝

鎌倉第三代の將  
軍  
頼朝の子  
承久元年（六七）  
卒

月照

京都清水寺の僧  
幕末の勤王家  
安政五年（五〇）  
西郷隆盛と相抱  
いて薩摩海に投  
じ遂に絶息した  
年四十六  
贈正四位

平野國臣

福岡藩士  
幕末の勤王家  
元治元年（五四）  
卒  
年四十三  
贈正四位  
梅田雲濱  
名は源次郎  
小濱藩士  
幕末の勤王家  
安政六年（五九）  
卒  
年四十四  
贈正四位

橋諸兄の

白髪いかゞ御詞

ふる雪の白髪までに大皇につかへまつれば貴くもある

の歌には、白髪に至るまで大君に仕へ奉つた忠臣の面目が躍如

として現れてゐる。又楠木正成の七生報國の精神は、今も國民

を感奮興起せしめてゐる。又我が國には古より、或は激越に或

は沈痛に忠君の心を歌に託して披瀝したものが少くない。即

ち源實朝の

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心我あらめや

も

僧月照の

大君の爲には何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むと

も

平野國臣の

數ならぬ身にはあれども希はくは錦の旗のもとに死にて

む

梅田雲濱の

君が代を思ふ心の一すぢに我が身ありとも思はざりけり

等の如き、それである。

忠は、國民各自が常時その分を竭くし、忠實にその職務を勵むこ  
とによつて實現せられる。畏くも、教育ニ關スル勅語に示し給  
うた如く、獨り一旦緩急ある場合に義勇公に奉ずるのみならず、  
父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持し、博  
愛衆に及し、學を修め、業を習ひ、智能を啓發し、徳器を成就し、更に  
公益を廣め、世務を開き、國憲を重んじ、國法に遵ふ等のことは、皆

これ、大御心に應へ奉り、天業の恢弘を扶翼し奉る所以であり、悉く忠の道である。

このことは、明治天皇の御製に、  
*身分は庶民に*  
ほどく、にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわが

力なる

*あらなむあてて*  
*ありなむあてて*

國のため身のほどくに盡さなむ心のすゝむ道を學びて

と仰せられてあるによつて明らかである。自己の職務を盡くすことが即ち天皇の大御業を扶翼し奉る所以であるとの深い自覺に立ち、

入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテカヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安

榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ

と仰せられた聖旨のまに／＼つとめ勵むことは、即ち臣民たるものの本務であり、日本人としての尊い務である。

(文部省 國體の本義)

## 二 國文學の精神

久松 潛一

久松潛一  
國文學者  
文學博士  
東京帝國大學教授  
明治二十七年(二  
五四)愛知縣生

國文學の精神は何であるか。或は月花をめるといふ優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。しかし、よく考へて見れば、もつと生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私はこゝに國文學を流れる精神として、まことともののははれと、幽玄といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。

第一にまことの精神とは、あるがまゝのもの、即ち事實をあるがまゝに表現する精神を中心としてゐる。これが上古の國文學

を貫く精神であると思ふ。これを内容的思潮の方面から見ると、そこに強い國家的精神と個人的精神とが現れてゐる。國家的精神は古事記を中心として見られる精神で、この國家は神によつて作られ、宇宙も人類も亦神によつて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神である。同じ神の中に自然神もあり、人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり、祖先神もあり、色々であるが、何れにしても、自己より偉大なる神によつて生きる精神は、古代人の眞實なる心持のまゝ、古事記に表現されてゐるのである。

もとよりそこには想像もあり、超現實的なことも多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものでなく、彼等に眞實なものとして映じたものがそのままに傳はつてゐるのである。

人麿  
柿本氏  
持統文武兩天皇  
の御代の歌人  
皇子  
天武天皇の御子  
草壁皇子・高市  
皇子など

さてまた萬葉集の中心となる精神は個人的の精神であると思ふ。人麿は國家の建設を説き、神をうたつてゐるが、その中心は皇子の薨去を悼む哀痛の感情にある。かくて一方には自然に只管なる愛を向けるやうになり、自然の中に身を投入れて、そこに自己と自然と一つになつた境地が見られる。また一方には人生に向かつて情熱的な愛を歌ひ、或はこの人生の享樂すべきをうたひ、或ははかなき世であつても、現實にある間は現實をよりよく生きていかうとする強い現實に發する愛をうたつてゐるのである。

この素樸な、まことの感情を中心とする上代人の物の見方を見つめていくと、第一に一元的・綜合的である。神と人、自然と人を一つのものとしてながめる。第二に率直にして積極的である。

實朝  
源氏  
鎌倉三代の將軍  
承久元年(一七九)  
卒  
年二十八

見方が單純で、紆餘曲折がない。第三に物を觀察するに多く具象的である。歌を詠むにも、眼に觸れた事象を先づうたふ。對象をあるがまゝに直觀し、これを直接的に表現するのである。而してこの精神は文化が爛熟したとき、復古的精神として常に現れて來るのである。復古的精神とは單に文字通り古に復るのではない、古代人の眞實性と素樸性との復ること、その精神である。例へば平安末期に於て現實生活に頽廢と行きづまりとを生じたとき、實朝は萬葉集の精神に復つてその素樸性と眞實性を求めたのであると思ふ。かくて實朝の心境を見ると、一方には國家的精神が現れてゐる。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめ  
やも

一方には人間的な愛の精神が現れてゐる。

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母をた  
づぬる

又自然をうたふにしても、實朝の歌は萬葉時代のやうにありのままを見つめる、そしてありのままに表現するといふ態度が現れてゐる。

第二に、もののはれの精神は、ものの中に見出したあはれの精神である。あるがまゝのものの上に見出したあるべき世界である。それは心と形との調和の中に見出される情熱の世界であるともいへる。本居宣長は、もののはれを源氏物語の基調であるとし、又平安時代文學の基調としてゐる。それは上古文

本居宣長  
國學四大人の一  
伊勢國(三重縣)  
松阪生  
享和元年(一八一)  
卒  
年七十二  
贈從三位

學の中に見える素樸な感情ではなく、それをあくまで洗煉した境地である。あるがまゝのものからあるべきものを見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あなおもしろ、あなたのし」とある「あはれ」である。随つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。これを歌の上に見るに、平安時代の歌は萬葉時代のやうに感情を直接的に表現するより、それを反省する所から理智的傾向になる點がある。従つて、強烈なる感情を沈靜にし、情趣化する事にもなる。古今集の歌がそれである。そこに素樸的から技巧的な點も生ずると思ふ。平家物語は叙事詩的の物語であるが、勇壯な戦闘の間を色どつて流れてゐるものは、もの

あはれの精神である。そしてそこに華やかな、勇壯な悲壯美を形づくつてゐると思ふ。

第三に、幽玄の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に「或事關<sup>レ</sup>神異、或興入<sup>レ</sup>幽玄」とあつて、本來はものあはれとほゞ相近い意味であるが、平安末期の世相の轉變から人生の無常を觀じ來り、宗教的の考が深く入込んで、物寂しい境地を主とするやうになつた。俊成が得意な歌として、

夕されば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草の  
さと

を擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪する事によつてその靜寂の境

眞名序  
紀波望撰

俊成

藤原氏

歌人

千載集の撰者

元久元年(八六四)

卒

年九十一

西行

俗名佐藤義清

歌僧

建久元年(一六〇)

寂  
年七十二

地を見出して來たのも、それである。美しく咲く櫻の花陰にひそむ静けさ、寂しさを見出たのが西行であつたと思ふ。而してその幽玄は俊成のよくいふ遠白い即ち壯大といふ感情と、心が細い即ち繊細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。

而してこの精神は、一步進めて考へると、近古文學を流れる傳統的精神や、個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一致するものがあると思ふ。即ち文學を個性的にそのまま表現せず、之を傳統の型の中に入れて、そこからいふしにかけた上で表現するのである。大きな自由な精神を型といふ窮屈な狭いものの中に入れて、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。これは徒然

愚にして

徒然草第一八七

段参照

草に見える道といふ事によつてもわかる。愚にして慎めるは巧にしてほしいまゝなるにまさるといふのは、畢竟道は一の型の中に入れて精練して始めてすぐれたものとなるかと考へたのである。そこに専門家を敬する心持が出で、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずる。この型の中に入れる事によつて、その小さい我の否定された中から現れて來る大きな自然、ここに幽玄が現れて來ると思ふ。茶にしても、庭にしても、型の中に入つて、而も型に捉はれない自由な境地を見出して來るのであるまいか。それは最も小さいものの中にある最も大いなる生活である。而してこれは室町時代の藝術を代表する能樂に於てもさうである。一の型の中に入れて、その中に普遍的な人間性をあらはさうとしてゐる。非家では到底味はふことの

非家

専門家ならぬ人

世阿彌  
 觀世元清  
 室町時代の能樂  
 謡曲を大成した  
 人  
 康正元年(三二五)  
 歿  
 年八十一  
 芭蕉  
 松尾氏  
 江戸時代の俳人  
 元祿七年(三三〇)  
 歿  
 年五十一

出来ない境地である。世阿彌のいふ幽玄の精神もやはりそこにあると思ふ。この幽玄は、近世文學に於ては、更に芭蕉の閑寂の精神ともなつてゐる。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質をさびであると思つたのみならず、このさびに徹して、さびを生活の上に見出して來てゐる。「高く心をさとりて俗にかへるべし」といふのは、生活をさび化し、幽玄化する事であると解せられる。かくの如くにして、自然と人生との窮極であるさびや幽玄は、又藝術の窮極でもあつたのである。

あるがまゝのものに理念を見出した境地がまことであり、あるがまゝのものの中からあらうとするものを見出して表現したのがものあはれであり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それをいぶしにかけて、統一せしめ、結晶せしめた大白光の如き境地が幽玄であらう。童のやうな素樸さから華やかな境地となり、そしてさびに達するのである。

かくの如く見るとき、まことのものあはれと、幽玄とは一見異なつた理念のやうで、而も本質的な相違ではなく、展開のそれぞれの過程である。まことが童心と素樸との藝術を生み出し、ものあはれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に幽玄がすべての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として表さうとする、ある點からいへば象徴的な藝術を生み出したかと思ふ。而して是等の展開流動する精神を統一したもので、そこに國文學の本質が見出されるであらう。

(上代日本文學の研究)

夏目漱石

名は金之助

英文學者

小説家

大正五年歿

年五十

三草枕

夏目漱石

山路に登りながら考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば

窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなる。何處へ越し

ても住みにくいと悟つた時、詩が生まれて畫が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ、鬼でもない。矢張向か

ふ三軒兩隣に、ちらくする唯の人である。唯の人が作つた人

の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば、人でな

しの國へ行くばかりだ。人でなしの國は、人の世よりも猶住み

にくからう。

草枕

明治三十九年

五高右職中

明治二十年(丁酉)

内容

青年画家

美し感と水

作者の藝術感

美の世界の邊

創造

自然主義

現実の暴露

人に觸れ

作者の位置

余松

狂人 狂言 東洋の

詩人



夏目漱石  
世を長閑にし、人の心を豊  
目にするゆゑに尊い。  
住みにくき世から、住みに  
くき煩を引抜いて、有難い  
世界をまのあたり寫すの

が詩である、畫である。或は音楽と彫刻とである。こまかに言  
へば、寫さないでもよい、只まのあたり見れば、そこに、詩も生き歌  
も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起る。丹青



は畫架に向かつて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、よく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱する點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得る點に於て、我利我慾の羈絆を掃蕩する點に於て、——千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

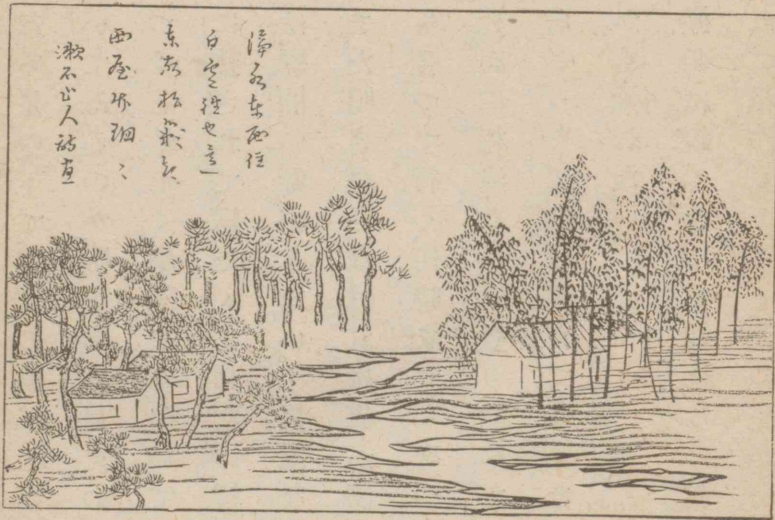
世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十年にして、明暗は表裏の如く、日のある所にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。——喜の深きとき、

社  
の  
子  
を  
不  
同  
不  
二

憂愈、深く、樂しみの大きいほど、苦しみも大きい。これを切離さうとすると、身が持てぬ。片付けようとすれば、世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば、寐る間も心配だらう。閣僚の肩は、數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。旨い物も食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ。存分食へば、後が不愉快だ……余の考がこゝまで漂流して來たときに、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏みそこなつた。平衡を保つために、すはやと前に出した左足が、仕損じの埋めあはせをすると共に、余の腰は、ぐあひよく方三尺ほどな岩の上におりた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍りだしただけで、さいはひに何の事もなかつた。

立上る時に、向かふを見ると、路から左の方に、バケツを伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か分らないが、根元から頂まで悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤く、だんだらにたなびいて、<sup>山</sup>續き目が確と見えぬ位、霞が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんできて眉に逼る。禿げた側面は、巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやげに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ、はつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、黒い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。土をならすだけなら、さほど手間も入るまいが、土のなかには大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ。石は切碎いでも岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等

筆蹟  
 テテラ  
 隔水東西住  
 白雲往也還  
 東家松籟起  
 西屋竹珊々  
 漱石山人詩畫



白雲往也還  
 東家松籟起  
 西屋竹珊々  
 漱石山人詩畫

(筆石漱目夏)

家 田

の爲に道を譲る氣色はない。向かふで聞かぬ上は、乗越すか、廻らなければならぬ。巖のない處でさへ、歩きよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くといはんより、川底を涉るといふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶら〜と七曲へ懸る。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えぬ。聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に螫されて居た、まれない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を、鳴き盡くし、鳴き明かし、また鳴き暮さなければ氣が濟まぬと見える。其の上、何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只、聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落

藝術の詩

シエレーの  
雲雀の詩

シエレー  
英國の詩人  
(西曆一七三二—一八二〇)  
雲雀の詩  
一八二〇年作

ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も揚る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。春は眠くなる。猫は鼠を取ること忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只、菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いた時に、魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものうちで、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。忽ちシエレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えた所だけ

朱観の悲観  
悲観の朱観

諳誦して見たが、覚えて居る所は二三句しかなかつた。其の二三句のなかに、こんなものがある。

前を見ては、後シレヒを見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。

腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想、籠るとぞ知る。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛マンカクの愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で済むツクかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に、神経が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。

感情移入

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に、時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へ伸びて、真中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振りむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座して居る。暢氣シヤイなものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、只、嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ来て、自然の景物に接すれば、見るもの、聞くもの面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

併し、苦しみのないのは、何故だらう。只此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。此の景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力は、こゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽きくした。飽きくした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗

念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。何處までも世間を出る事が出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、此の境を解脱することを知らぬ。何處までも、同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも、無理ではない。

嬉しい事に、東洋の詩歌は、そこを解脱したのがある。「採菊東籬下、悠然見南山」只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を、全く忘れた光景が出てくる。垣の向かふに隣の人が覗いてる譯でも

採菊東籬下  
晉の陶淵明の句

獨坐幽篁裏  
唐詩選にある王維の詩

木如歸

德富盛花の作  
金色夜叉  
尾崎紅葉の作

桃源

秦の亂を避けた人の隠れた村といふ  
支那湖南省湘潭の近く

王維

盛唐の詩人  
(三五九—四一七)

淵明

陶潛の字  
晉の詩人隱逸  
(一〇一五—一〇七九)

なければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と、出世間的に、利害得失の汗を流し去つた心持になれる。「獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月來相照。」只二十字のうち、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は、不如歸や、金色夜叉の功德ではない。汽車、汽船、權利、義務、道德、禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却して、ぐつすり寐込む様な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ／＼暢氣な扁舟を浮かべて此の桃源に溯る者はない様だ。余は、固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を、今の世に布教して廣げよう

ファウスト  
ゲーテの傑作  
ハムレット  
シェクスピアの  
名作

といふ心掛も何にもない。只自分にはかういふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも、楽しみになるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも有難く考へられる。かうやつて只一人、繪具箱と三脚几を擔いで、春の山路をのそ／＼歩くのも全くこれが爲である。淵明、王維の詩境を、直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願、一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情は、さう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寝た男でもなからう。やはり餘つた菊は花屋へ賣つて、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余も其の通り、いく

那古井 假設の地名であらう

松尾芭蕉 伊賀國上野生 元祿七年(二三五)歿

石山 滋賀縣大津市石山町

岩間 石山村南郷

國分山 石山町國分にある山

國分寺 聖武天皇天平十三年(七四〇)ころ諸國に創建

翠微 謂「未レ及ニ頂上ニ在レ旁陀之處」山氣青緑色、故名「翠微」

ら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山の中へ野宿する程、非人情が募つては居らぬ。こんな處でも人間に逢ふ。ぢんく、端折りの頬冠や、赤い腰卷の姉さんや、時には、人間より顔の長い馬にまで逢ふ。百萬本の檜に取圍まれて、海面を抜く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭は、なかく、取れない。それどころか、山を越えて、落ちつく先の今宵の宿は那古井の温泉場だ。(漱石全集—草枕)

四 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像と

冬の日暮

春の日暮

夏の日暮

秋の日暮

猿蓑

猿蓑

猿蓑

猿蓑

猿蓑

猿蓑

猿蓑

蘆(爾雅疏)

光を和げ 和「其光」同「其」

曲翠 芭蕉の門人

近江膳所 近江膳所

五十年や、近き

元祿三年(二三三)

芭蕉四十七歳

象潟

秋田縣羽後國島

海山の西北麓の

名所

鳩の浮巢 かいづぶりが蘆の枯葉などで作つた水上の巢

やがて出でじ

吉野山やがて出でじと思ふ身を

花散りなばと人

や待つらん (西行法師)

かや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いと、神さび物しづかなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ屋根漏り壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠子の伯父にたり。りしを今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。予亦市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き身は、蘆の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波に漂ふ鳩の浮巢の流れ留るべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月の初、いとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。

吳楚東南に走り  
昔開洞庭水、今  
上岳陽樓。吳楚  
東南折、乾坤日  
夜浮。……  
（唐の杜甫）  
瀟湘洞庭  
惠宗煙雨歸雁、  
坐我瀟湘洞庭。  
欲喚扁舟一歸  
去、故人道是丹  
青。  
（宋の黃山谷）  
笠取  
京都府宇治郡笠  
取村笠取  
石山の西南十二  
三上山。  
近江富士  
石山の東北二十  
四料  
士峯

さすがに春の名残も遠からず、躑躅咲きのこり、山藤松にかゝり  
て、時鳥しばく過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥  
のつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、  
身は瀟湘洞庭に立つ。山未申にそばだち、人家よきほどに隔り、  
南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。比叡の山比良の高嶺  
より辛崎の松は霞こめて城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取  
に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に  
水鶏のたゞく音、美景物として足らずといふことなし。中にも  
三上山は士峯の佛に通ひて、武藏野の舊き住家も思ひ出でられ、  
田上山に古人をかぞふ。  
なほ眺望隈なからんと、後の峯に這上り、松の棚つくり、藁の圓座  
を敷いて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、主簿峯

富士山  
古人  
猿丸大夫  
墓は田上山の麓  
にあるといふ  
海棠に  
徐老海棠集上、  
王翁主簿峯庵。  
（宋の黃山谷）  
とくくくの雫  
とくくくと落つ  
る岩間の若清水  
汲みほすほども  
なきすまひかな  
（傳西行法師）  
高良山  
福岡縣筑後國三  
井郡高良山神宮  
寺  
甲斐何がし  
藤木甲斐守教直  
寛永時代の書家  
慶安二年（三〇九）  
歿  
年六十八



幻住庵の額

に庵を結べる王翁徐佷が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となり  
て、屣顔に足をなげ出し、空山に風を捫つて  
坐す。偶、心まめなる時は、谷の清水を汲み  
て自ら炊ぐ。とくくくの雫を侘びて一爐  
の備いと輕し。  
はた昔住みけん人の殊に心高く住みなし  
て、巧みおける物ずきもなし。持佛一間を  
隔てて夜の物を納むべき處など聊かしつ  
らへり。さるを筑紫高良山の僧正は賀茂  
の甲斐何某が愛子にて、此の度洛に上りい  
まそかりけるを、或人をして額を乞ふ。い  
と易々と筆を染めて幻住庵の三字を送ら



岡兩

岡兩ヒテニツ景曰、囊子行、今子止。囊子坐、今子起。何其無特操一與。  
(莊子)

樂天

唐の詩人白居易の字  
會昌六年(八五〇)歿

老杜

唐の詩人杜甫  
太曆五年(四三〇)歿  
年五十九

猿蓑

芭蕉七部集の一  
元祿四年(三五五)成

る。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝は稀々とぶらふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里の男ども入來りて、猪の稻食荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日已に山の端に懸れば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴ひ、燭を秉つては岡兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとはあらず。や、病身、人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、この一筋につながる。樂天は五臟

旅

宗祇  
芭蕉

幸田露伴

名は成行  
文學者  
小説家  
帝國藝術院會員  
文化勳章第一回の拜受者  
慶應三年(三五七)江戸生  
凡兆  
加賀の人  
京都に住む  
歿年未詳  
去來  
肥前の人  
京都に住む  
寶永元年(三五〇)歿  
年五十四  
丈草  
内藤氏  
尾張の人  
近江の栗津に隱  
居す  
元祿十七年(三三三)歿  
年四十五  
落柿舎  
去來の別宅  
京都の西郊嵯峨野(右京區嵯峨町)にある

の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨ててふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり夏木立

(芭蕉全集—猿蓑集)

五 猿蓑鈔

幸田露伴

猿蓑は元祿四年仲夏凡兆去來の需によりて尾に題せるよしの丈草の跋文によりて、同三年あたりより撰の企ありしか否やは知らず、四年辛未を以て凡兆去來の手に成りしこと明らかなり。凡兆去來は京に在り、芭蕉は三年四月江州石山の奥なる幻住庵に入りて居を定め、四年四月は京の嵯峨なる去來が落柿舎に遊びなどせるなれば、此の間に芭蕉の心裁手定を得て猿蓑の出づるに至りたること推知すべし。集の體は先づ多く發句を載せ

芭蕉七部集の一  
元祿二年(二三四九)  
成る

談林調  
西山宗因の開い  
た俳諧の一派

冬の日  
芭蕉七部集の一  
貞享元年(二三四四)  
成る  
炭俵  
芭蕉七部集の一  
元祿七年(二三五二)  
成る

たること曠野の如くなれど、末卷に至りて幻住庵の記及び庵に  
關する詩俳句を載せたること、いたく他の集と様かはりたり。  
集の調は華實俱備、奇正雙收、俳諧者流の所謂不易と流行とを兼  
ねて、既に全く古調談林調を蟬脱し、弄語、諛辭の窠臼を出で、通俗  
の言を以てすと雖も、詩歌の眞精神に於て立つあらんとするの  
蕉風を渾成せるにちかし。卷一より卷四に至るまで、收むると  
ころの發句、佳なるもの多し、他の集の及ぶ能はざるところなり。  
連句に至りては、冬の日は力を用ふること多きに過ぎて、煥爛な  
れども固し、炭俵は興を取ること輕きに傾きて清新なれども淺  
し。此の集のは中正醇雅、しつとりとして好し。篇什多からさ  
るを憾むと雖も、第三第四の品に墮つる者も亦これ無し。世の  
猿蓑を好むもの多きも宜なりといふべし。

蕉風

眞州

換林

蕉風

十  
七

物附  
心附(内容)

曲齋  
七部婆心録を著

涼岱  
建部綾足

小説家  
俳人

歌人  
安永三年(二三四四)

歿  
年五十六

五  
猿蓑鈔

鶯の羽も刷ひぬはつしぐれ(冬) 去 來  
風蕭々として寒林骨あらはなるに初時雨のさつと降りそ、ぎ  
て梢にとまり居れる鶯の子然として獨り在るさまをいへる一  
幅の疎林寒雨の好畫圖なり。たゞこれ韵致を以て勝る、理致を  
以て高き句にはあらず。しかるに舊解に、彼方の枝にとまりた  
る鶯の羽を刷ふを見て、人として容を修めざるは鳥にしかずと  
觀ずるさまなり。などいへるは、曲齋の蛇足なり。鶯も羽をと作  
るべきをかくいへり。といへるは涼岱の愚説なり。「羽もといへ  
るも文字、諸鳥へかけていへるなり。といふも、雨やどりせる人へ  
かけていへるなり。といふも、皆要無き贅言なり。鶯の平生の姿  
鳥の雨風にあへる姿などを知らば、この句の文字を下せる所  
以、かいつくろふといへる語を用ひたる所以もおのづからに曉

るべくして、去來の詩眼精警、詩腕靈活なるを悟るべし。鳶は鴟フクロウ、梟フクロウと並稱して、梟などの如く、羽毛ふくよかに、姿むくつけく、鳥鳩なんどの如くに引締りたるさまならぬものなり。又一切の鳥類は雨にも風にも其の頭の方をさしむけて、必ず身の羽毛の逆立たぬやうにするものなり。もといひ、刷ふといへる、極めて面白く、時雨の颯然サクサクとして始めて至る、寒樹孤鳶、情景想ふべし。時雨なるかな、鳶なるかな、時雨なるかな。

一ふき風の木の葉しづまる（脇句） 芭蕉

春雨にも秋雨にもあらず、夏の夕立雨にもあらず、時雨の降りたるさま一句の中にあらはれて、且起り且休める風、忽ち降り忽ち止める雨、落葉のはらくと墜ち、かさこそと走り、旋り舞ひてさしてしまれる状、僅々十四字の上に見ゆ。

股引の朝からぬる、川こえて（三句） 凡兆

朝から濡る、といへるに其の人の情を具して、寒雨落葉の景の中に小川をかち渡りする男を點じたり。「橋の落ちたる川邊に行路難を歎ずる」など釋せるは、聊か過ぎたり。凡兆は肚裏に物有る如き句を作らで、さらさらとして氣味新鮮なるを喜び詠ずる作者なり。

たぬきをおどす篠張の弓（三句） 史邦

篠の張弓とすべきを篠張の弓としたるに聊か曲あるところを看取すべし。挑灯チカウチの弓、突上窓ツキアガマドの弓、皆弓の名を負ひて眞の弓にはあらず、こゝのは弓は弓に近けれども、これも弦を張りたる案山子の持弓ごときにはあらず。舊解皆前句の川越ゆる男、狸おどしの篠弓を携へたりと爲せるをもて、その趣は解し難く、その

史邦  
中村氏  
芭蕉の門人  
尾張の人  
京都に住む

伊勢貞丈

國學者

故實家

江戸幕府の士

天明四年(1814)

歿

年七十

夫木抄

室町時代の歌集

藤原長清撰

状は笑ふべきを致せり。大の男の篠弓一張持ちて股引の濡る  
る川を涉れるさま、狸をおどすとよりは狐につまゝれたる姿な  
るべし。篠弓ならば二尺七八寸なるべく、伊勢貞丈も然いへり。  
さる小さき細弓を如何なるところに如何に置きて狸をおどす  
べきかや。篠ためて雀弓張る男の童ひたひ烏帽子のほしげな  
るかな。といへる西行の戯歌は夫木抄卷三十二に見えたれど、そ  
れは雀射んとする男の童なれば篠弓も似つかはし、股引男の篠  
弓持ちて川涉りするが狸をおどさんとするなりとは餘りに戯  
畫の如く虚談の如し。甚だしきかな後の俳諧者流の世の實際  
にも疎く詩の眞味にも遠ざかれるや。これは篠むらの篠の強  
きを地に生ひたるまゝ、撓め伏せて弓の如くに張り、樹の枝極な  
んどもて土に縫ひつけ置き、すこしく之に觸るれば機發して俄

然として觸れたるところのものを彈き撃つやうにするものを  
いへるなり。狸狐兎などの類皆これをもて威し畏れしむべ  
く、其の大なるものに至つては檜櫟などを弓として野猪をも  
おどすべく、今の語にぶつばたきといひて、山村僻地などにては  
稀ならず爲すことなり。一句は正しく此の事にて、殊に篠叢は  
川沿などに多きものなれば、前句との照映も自然にして宜し  
く、濡れ股引に狸おどし、感情景境相應じて如何にもわびしく寂  
びたる片里のさま見ゆ。

まいら戸に葛這ひかゝる宵の月

芭蕉

まいら戸はまひら戸なりや、又まゐら戸なりや、不明なり。多く  
玄關に立つる戸なれば、參らう戸なりといふは疑ふべし。框の  
間の全部を板もて張り、これに一寸内外の幅ある木を繁く横さ

股引の濡る  
る川を涉れる  
さま、狸をおど  
すとよりは狐に  
つまゝれたる姿  
なるべし。

空然  
 松本氏  
 江戸の人  
 猿蓑さがしを著す  
 天保十一年(一八三〇)  
 〇歿  
 年五十六

まに取附けたる戸なり。板を綿板といひ、取附けたる木をまいら子といひ、取附くるには小間がへしにするを常式とし、或は小間返しよりも間を疎らにもす。小間返しとは其の取附くる子と、子の間とを同じにするをいふ。子と框とを黒塗などにするを常とす。士人の家、醫庄屋寺など、玄關正面に用ひらる。葛這ひかゝるは、宵の月とあるによりて葛の影這ひかゝると看る方よし。實に葛の這ひかゝれるとするも、宜しかれど、さては宵の月いたづらに空に在りて有るかひも無からん。前句との懸りは解を須たで明らかなり。「篠張の弓の長押などに懸けてありたるを見て其の家のさまを附けたり」といへる空然の註「葛の影を指さして、あの如くなれば狸が飯盗みに来て叶はずと噂する」といへる曲齋の釋も要無きことならん。「零落の山寺など

曉臺  
 加藤氏  
 俳人  
 寛政四年(一四三三)  
 歿  
 年六十一  
 寂蓮  
 俗名藤原定長  
 鎌倉時代の歌僧  
 建仁二年(一一三三)  
 寂

栗栖野  
 今の京都市東山区山科町花山のあたり

と見るべし」と曉臺のいへるは、山寺と限りていはざるも却つて宜し。夫木抄卷二十七、人住まで鉦も音せぬ古寺にたぬきのみこそ鼓うちけれどふ寂蓮法師の歌も思ひ合はされてをかし。  
 人にもくれず名物の梨  
 去 來

田舎のまいら戸あるやうなる家又は院の主人など、得て慢氣強く、見識ばり、又は不思議に物愒みして刻薄なるなどが有るものなり。澁紙袋の月に黒々と庭の梨子のなりたるをいへり。徒然草神無月の頃栗栖野を過ぎての段、彼方の庭に大きな柑子の樹の枝もたわゝになりたるがまはりを厳しく圍ひたりしこそ少しことさめて此の樹無からましかばと覚えしか」といへる趣もあるべくや。

かきなぐる墨繪をかしく秋暮れて

史 邦

磁盆または高坏などに名物の見事なる梨ありとして、氣象卑しからぬ人の世をも人をも清らに楽しく經なんどする趣をいへり。かきなぐるの五文字よく働きて其の人柄見ゆるが如く、畫家と見んよりは隱士高人と見るべく、名物の梨子も此の人にあひてはさして珍重もされず、自らも貪らず人にもくれず差置かるゝなり。但し名物のおのづからにしてかゝる人の許に現るゝも亦おもしろき世の態なり。前句名物の一語に着眼着力して此の句は成りたるなるべし。墨畫に秋暮るゝ自然のうつり宜し。

はき心よきめりやすの足袋

凡 兆

前句の人の穿けるなり。めりやすは今も用ひる語ながら、當時のは今のものとは少しく異なりて粗なりしならん。或はいふ

今のメリンスの足袋ならんと。確知せず。鉛筆・石鹼等と共に毛織・毛編も元祿の頃既に用ひられしなれど、めりやすの足袋は猶普通のものにはあらで、物好の人の侈りにやありけんと思し。一句に庭前屋後の逍遙のさまありて、前句の秋暮れてと照應せり。  
(ひさご猿蓑抄)

### 六 比良の山風

宮内卿

後鳥羽天皇の宮

女

壽永頃の歌人

太上天皇

後鳥羽法皇

延應元年(一一八一)

崩

壽六十

五十首奉りし中に、湖上花を。

宮 内 卿

花さそふ比良の山風ふきにけりこぎゆく船のあと見ゆるまで

和歌所にて、關路鶯といふことを。太上天皇

鶯のなけどもいまだふる雪に杉の葉しろきあふさかの

後徳大寺左大臣

藤原實定

建久二年(八五二)

卒

年五十一

筆蹟

月かけのきよみ  
かせきにすみぬ  
ればおきのつり  
ふねかすことに  
みゆ

俊成

藤原氏

歌人

千載集の撰者

元久元年(八六四)

卒

年九十

頼政

源氏

武將・歌人

治承四年(八六〇)

卒

年七十七

藤原定家

歌人

俊成の子

新古今集撰者の

一人

仁治二年(九〇一)

卒

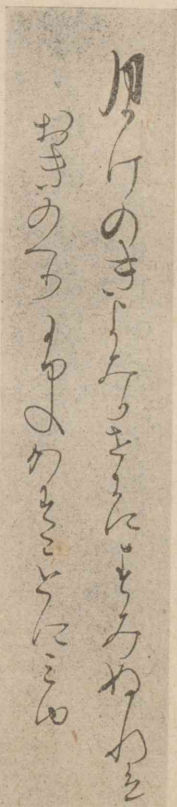
年八十

せき

晚霞といふことをよめる。

後徳大寺左大臣

なごの海のかすみの間よりながむれば入日をあらふお  
きつしらなみ



俊成筆

百首歌奉りし時。

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山吹のはなのつゆそふ井出の玉  
がは

夏月をよめる。

從三位 頼政

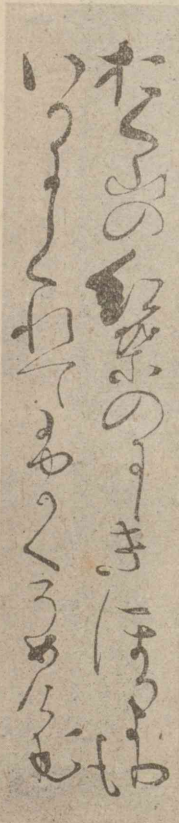
庭のおもはまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月

かな

西行法師すゝめて、百首歌よませ侍りけるに。

藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋のゆふ  
ぐれ



定家筆

攝政太政大臣家百首歌合に。

藤原有家朝臣

風わたる浅茅がすゑの露にだに宿りもはてぬよひの稻  
づま

湖邊月といふことを。

藤原家隆朝臣

筆蹟

おく山の紅葉の  
にしきほかより  
もいかにしくれ  
てふかくそめけ  
む

攝政太政大臣

藤原良經

建永元年(八六六)

卒

年三十八

藤原有家

重家の男

歌人

建保四年(八六六)

卒

藤原家隆

光隆の子

歌人

新古今集撰者の

一人

嘉禎三年(八七三)

卒

年八十

鴉の海や月の光のうつろへばなみの花にも秋は見えけり

五十首の歌奉りし時。

攝政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな

筆蹟

あまのはらそら  
さへさえやわた  
るらむこほりと  
みゆる冬のよの  
月

あまのはらそら  
さへさえやわた  
るらむこほりと  
みゆる冬のよの  
月

筆 隆 家

後冷泉院の御時、うへのをのこども大井河にまかりて紅葉浮水といへる心をよみ侍りけるに。

藤原資家朝臣

篋師よまでこととはむ水上はいかばかりふく山のあら

藤原資家

資房の男  
歌人

しぞ

題しらず。

藤原清輔朝臣

冬がれの森のくちばの霜のうへにおちたる月の影の寒けさ

百首歌奉りし時。

藤原定家朝臣

駒とめて袖打拂ふかげもなし佐野のわたりの雪のゆふぐれ

題しらず。

前大僧正慈圓

庭の雪にわが跡つけて出でつるを訪はれにけりと人や見るらむ

定家朝臣の母みまかりて後、秋頃墓所近き堂にとまりてよみ侍りける。 皇太后宮大夫俊成

藤原清輔

顯輔の男

歌人

續詞花集の撰者

治水元年(八三三)

卒

慈圓

歌人

台座主

嘉祿元年(一一六〇)

寂

年七十一

慈鎮と謚す



まれに來る夜半もかなしき松風をたえずや苔の下に聞  
くらむ

和歌所歌合に湖上月明といふことを。

宜秋門院丹後

夜もすがら浦こぐ舟はあともなし月ぞのこれる志賀の

唐崎

鴨社の歌合とて人々よみ侍りけるに、月を。

鴨 長明

石川やせみの小川のきよければ月も流をたづねてぞす

む (新古今和歌集)

七 かぐや姫

丹後  
女歌人  
源賴政の弟賴行  
の女

長明  
歌人  
方丈記の作者  
建保四年(一一七六)  
寂  
年六十三  
かぐや姫  
小學國語讀本卷  
四、五、「かぐや  
ひめ」參照

日本文學物語  
の  
説話の材料  
の  
今作の材料  
軍  
句

今は昔、竹取の翁オキナといふものありけり。野山にまじりて竹を取  
りつゝ、萬づの事につかひけり。名をば讚岐造磨みやつこまろとなむいひけ  
る。その竹の中に本光る竹一すぢありけり。あやしがりて寄  
りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば三寸ばかりなる人  
いとうつくしうてあたり。翁いふやう、われ朝あさ毎まい夕ゆふ毎まいに見る竹  
の中なかにおはするにて知りぬ。子こになりたまふべき人ひとなめり。と  
て、手に打入れて家に持ちて來ぬ。妻つまの嫗おばに預けて養はず。美  
しきこと限りなし。いとをさなければ籠に入れて養ふ。  
竹取の翁、この子を見つけて後に竹を取るに、ふしを隔てて、よご  
とに黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて翁やうや  
う豊とよになり行く。この兒こ養ふほどにすくくと大きになりま  
さる。三月ばかりの内うちによき程なる人になりぬれば、髪あげな

どさたして、髪あげさせ裳着す。帳の内よりも出さず、いつきか  
しづき養ふ程にこの兒のかたちの清らなることよになく、家の  
うちは聞き處なく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この  
子を見れば苦しきこともやみぬ。腹だたしき事も慰みけり。  
翁竹を取ること久しくなりぬ。いきほひ猛のものになりけり。  
この子いと大きになりぬれば、名を三室戸齋部秋田を喚び  
てつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日う  
ちあげ遊ぶ。萬づの遊をぞしける。

春の初めよりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常より  
も物思ひたる様なり。或人の「月の顔見るは忌むこと」と制しけ  
れども、ともすれば人まには月を見てはいみじく泣き給ふ。ふ

づきの望の月に出で居て、切に物思へるけしきなり。近く使は  
る、人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや姫例も月をあはれが  
り給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にも侍らざめり。い  
みじく思し歎く事あるべし。よくく見奉らせ給へ」といふを

聞きて、かぐや姫にいふやう、なでふ心地すれば、かく物を思ひた  
るさまにて月を見給ふぞ、うましき世に」といふ。かぐや姫、月を  
見れば、世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべ  
き。といふ。かぐや姫のある所に到りて見れば、なほ物思へるけ  
しきなり。これを見て、あが佛何事を思ひ給ふぞ。思すらむこ  
と何事ぞ。といへば、思ふこともなし、物なむ心細く覺ゆる。といへ  
ば、翁、月を見給ひそ。これを見給へば、物思すけしきはあるぞ。と  
いへば、いかでか月を見てはあらむ。とて、なほ月出づれば出で居

つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々打歎き泣きなどす。これをつかふものども、なほ物思すことあるべしとさ、やけど、親を始めて、何事とも知らず。

はづきの望ばかりの月に出て居て、かぐや姫いたたく泣き給ふ。人めも今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも「何事ぞ」と問ひさわぐ。かぐや姫泣くく、いふ、さきくも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打出て侍りぬるぞ。己が身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契なりけるによりてなむ、この世界にはまうで來たりける。今は歸るべきになりければ、この月の望に、かのもとの國より迎に人

人まうで來んず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。といひて、いみじく泣くを、翁こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさはせしを、わが丈立並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。といひて、われこそ死なめ。とて、泣きの、しること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、月の都の人にて父母あり。片時の間とて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國には、數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひまつれば、いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず、罷りなむとする。といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人ども、年頃ならひて、立別れなむ

ことを心ばへなどあてやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に悲しがりけり。

この事を帝聞し召して、竹取が家に御使遣はさせ給ふ。御使に竹取出であひて泣くこと限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈まり、目も爛れにけり。翁今年は五十ぢばかりなりけれども、物思には片時になむ老になりけると見ゆ。御使仰言とて翁にいはいと心苦しく物思ふなるは、實にかと仰せ給ふ。

竹取泣くく申す、この望になむ、月の都よりかぐや姫の迎にまうて來なる。たふとく問はせ給ふ。この望には、人々賜はりて月の都の人まうて來ば、捕へさせむと申す。御使歸り參りて、翁の有様申して、奏しつることども申すを聞し召して宣ふ、二目見

六衛  
左右の近衛衛門  
兵衛府

姫  
竹取の翁の妻  
塗籠  
土藏造りの藏

給ひし御心にだに忘れ給はぬに、且暮見馴れたるかぐや姫を遣りては、いかゞ思ふべきとて、かの望の日司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人を差して、六衛のつかさ合はせて、二千人の人を竹取が家に遣はす。

家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓矢を帶して居り。母屋の内には、女どもを番にすゑて守らす。姫

塗籠の内にかぐや姫を抱かへて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはい、かばかり守る處に天の人にも負けむや。といひて、屋の上に居る人々にいはい、つゆも物空に翔らば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはい、かばかりして守る處に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひ侍りといふ。

翁これを聞きて、頼しがり居り。

これを聞きて、かぐや姫は、鎖し籠めて守り戦ふべきしたぐみをしたりとも、あの國の人をばえ戦はぬなり。弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、皆開きなむとす。あひ戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらず。翁のいふやう、御迎に來む人をば、長き爪して、眼をつかみつぶさむ。さが髪を取りてかなぐり落さむ。さが尻を搔きいて、こゝらのおほやけ人に見せて、恥見せむと腹立ちをり。

かぐや姫いはく、聲高になのたまひそ。屋の上に居る人どもの聞くにいとまसानし。いまずがりつる志どもを思ひも知らで罷りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり。親たち

今更なる  
いふは  
いふは  
いふは

のかへりみをいさゝかだにつかうまつらで罷らむ道も安くもあるまじきに、月頃も出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむことの、悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人は、いと清らにて老いもせずなむ。思ふこともなく侍るなり。さるところへまからむずるも、いみじくも侍らず、老い衰へたまへるさまを見奉らざらむこそ戀しからめといひて泣く。翁胸痛きことなしたまひそ。うるはしき姿したる使にも障らじとねたみ居り。

かゝる程に宵打過ぎて、子の時ばかりに、家の邊晝の明かるさにも過ぎて光りたり。望月の明かるさを十あはせたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆる程なり。大空より人雲に乗りて、

降り来て、地より五尺ばかり上りたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物に魔はるゝやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、痿え屈まりたる中に、心さかしきもの念じて射むとすれども、外さまへ往きければ、何れも戦はて、心地たゞしれに<sup>みまもる</sup>しれてまもりあへり。立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、家に造磨まうで來といふに、猛く思ひつる造磨も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、「汝をさなき人、聊かなる功德を、翁つくりけるによりて汝が助にとて片時のほどとて降ししを、そこの年頃、そこの金賜ひて、身を換へたるが如くなりたり。かぐや姫は、罪をつくり給へ

りければ、かく賤しきおのれが許に、しばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに怪しくなり侍りぬ。又他處に、かぐや姫と申す人ぞおはしますらむ」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出しておはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、いざかぐや姫、穢き處に、いかで久しくおはせむ」といふ。立て籠めたる所の戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも人はなくしてあきぬ。姫抱きて居たるかぐや姫外に出でぬ。え留ままじければたゞさし仰ぎて泣居り。竹取心惑ひて泣きふせる所に寄りて、かぐや姫いふ、こゝにも心

にもあらで、かく罷るに、昇らんをだに見送り給へ。といへども、何しに悲しきに見送り奉らむ。われをばいかにせよとて棄てて



かぐや姫に昇る

は昇り給ふぞ。具して率ておはせねと、泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。文を書きて罷らむ。戀しからむをりく、取出て見給へ。とて、打泣きて書くことばは、

「この國に生まれぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、返すく、本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見

おこせ給へ。見すて奉りて罷る空よりも墜ちぬべき心地す。と書置く。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の藥入れり。一人の天人いふ、壺なる御藥奉れ、穢き處の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ。とて、持てよりたれば、聊か嘗め給ひて、少しかたみとて脱ぎおく衣に包まむとすれば、或天人包ませず、御衣を取出して着せむとす。その時にかぐや姫しぼし待て。といひて、衣着つる人は心ことになるなり。物一  
言いひ置くべき事あり。といひて文書く。天人遅しと心もとながり給ふ。かぐや姫、物知らぬ事な宣ひそ。とて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

かく數多の人を賜ひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうて來て、

取率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕つかうまつ  
らずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ず思し召し  
つらめども、心強くうけたまはらずなりにしこと。なめげな  
るものに思し召しとめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。  
とて、

頭中將  
藏人頭兼近衛中將

今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひいでぬる  
とて、壺の藥添へて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人取り  
て傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打着せ奉りつれば、翁を  
いとほし悲しとおぼしつる事も失せぬ。この衣着つる人は、物  
思もなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇り  
ぬ。その後翁、姫、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書置き  
し文を讀みて聞かせけれど、何せむにか命も惜しからむ。誰が

上達部

公卿  
公は攝政關白大  
臣  
卿は大中納言參  
議及び三位以上

殿上人  
四位上  
三位上

爲にか、何事もやうもなし。とて藥もくはず、やがて起きもあがら  
で病み臥せり。

中將人々を引具してかへり参りて、かぐや姫をえ戦ひ留めずな  
りぬることをこまくと奏す。藥の壺に御文添へてまゐらす。  
ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物も聞し召  
さず、御遊などもなかりけり。大臣、上達部を召して、何れの山か  
天に近きと問はせたまふに、ある人奏す、駿河國にあるなる山な  
む、この都も近く天も近く侍る。と奏す。これを聞かせ給ひて、  
あふことも涙にうかぶわが身には死なぬくすりも何に  
かはせむ

かの奉れる不死の藥の壺に、御文具して、御使に賜はず。勅使に  
は月岩笠といふ人を召して、駿河國にあなる山の頂にもて行く



べきよし仰せ給ふ。峯にてすべきやう教へさせ給ふ。御文不  
死の藥の壺ならべて、火をつけて燃すべきよし仰せ給ふ。その  
よし承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山  
をふしの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へたちのぼ  
るとぞいひ傳へたる。(竹取物語)

### 八 土佐日記鈔

出立ち

紀貫之

紀貫之  
平安朝の歌人  
古今集の撰者  
天慶九年(二六六)  
卒  
年六十五  
贈從二位  
その年  
朱雀天皇の承平  
四年(五五四)  
解由  
在任中の經理會  
計に相違ないこ  
との證明書

男もすといふ日記といふものを女もして見むとてするなり。  
その年の年はすの二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。  
その由いさゝか物に書きつく。  
或人縣の四年五年果てて、例の事ども皆しをへて、解由げゆなど取り

住む館  
國守の館  
土佐の國府は長  
岡郡にあつた

て、住む館より出でて、船に乗るべき處へわたる。かれこれ知る  
知らぬ送りす。年ごろよく具しつる人々なむ別れがたく思ひ  
て、しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。  
二十二日、和泉國まで平かにと願ひ立つ。藤原言實とよざね、船路なれど、  
うまのはなむけす。上中下酔ひすぎていとあやしく、潮海のほ  
とりにてあざれあへり。  
二十三日、八木康教といふ人あり。この人、國に必ずしもいひつ  
かふものにもあらずなり。これぞ正しきやうにて馬のはなむ  
けしたる。守がらにやあらむ、國人の常として今はとて見え  
なるを、心あるものは恥ぢずなむ來ける。これは物によりてほ  
むるにしもあらず。  
二十四日、講師馬のはなむけしに出でませり。ありとある上下、

童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に  
ふみてぞ遊ぶ。

海の上

九日のつとめて、大湊より那波のとまりをおはむとて漕出でけ  
り。これかれたがひに國のさかひのうちはとて、見送に來る人  
あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なむ、御館より出て  
給ひし日より、こゝかしこに追ひくる。この人々の深き志は、こ  
の海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれてゆく。こ  
れを見送らむとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕ぎゆく  
まに、海のほとりに留れる人も遠くなりぬ、船の人も見えぬ  
なりぬ。岸にも言ふことあるべし、舟にも思ふことあれど、かひ

九日  
承平五年(一九五五)  
正月九日  
大湊  
高知縣長岡郡に  
あつた  
那波  
高知縣安藝郡奈  
半利  
奈半利川の川口



ねまはりてつとめて  
なまはりてつとめて  
あまのこころや  
あまのこころや  
あまのこころや

蹟筆と之貫紀

宇多  
高知縣香美郡岸  
本村宇田

てけ  
天氣

なし。かゝれば、此の歌どもをひとりごとにしてやみぬ。

おもひやる心は海をわたれどもふみしなれば知らず  
やあるらむ

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。其の松の數、いくそばく、幾千年  
へたりと知らず。もとごとくに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞとびか  
ふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめるうた。

見わたせば松のうれごとくにすむつるは千代のどちとぞ  
おもふべらなる

とや。此の歌は處を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに、山も海も皆暮れ、夜ふけて  
西東も見えずして、てけの事職取の心に任せつ。男も習はねば  
いと心細し。まして女は船ぞこに頭をつきあてて、音をのみ

阿倍仲麿  
靈龜二年(二七五)  
唐に留學し後唐  
朝に仕へ寶龜二  
年(三三)彼の地  
に卒した  
年七十一



仲麿を見(芳年筆)

ぞなく。かく思へば舟子・楫取は船歌うたひて、何とも思へらず。  
二十日、昨日のやうなれば船出さず。皆人憂へ歎く。苦しう心  
許なければ、只、日の経ぬる  
數を、けふはいくか、二十日、  
三十日と數ふれば、および  
も損はれぬべし。いとわ  
びし。夜はいもねず。二  
十日の月出でにけり。山  
のはもなく、海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見て、昔、  
阿倍仲麿といひける人は、唐土に渡りて歸り來ける時に、船に乗  
るべき處にて、かの國の人馬のはなむけし、別惜しみて、彼處の漢

男文字  
漢字

詩作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づる  
までぞありける。その月は海よりぞ出でける。それを見て、仲  
麿のぬし、我が國にはかゝる歌をなむ、神代より神もよみたび、今  
は上・中・下の人も、かやうに別惜しみ、喜もあり、悲しびもある時に  
はよむ。とて、よめりける歌。  
あをうなばらふりさけ見れば春日なるみかさのやまに  
出でし月かも  
とぞよめりける。かの國人、聞きしるまじうおぼえけれど、こと  
の心を、男文字に、さまを書きいだして、こゝの言葉傳へたる人に  
言知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思の外になむ愛で  
ける。唐土とこの國とは言異なるものなれど、月の影は同じこ  
となるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そのか

みを思ひやりて、或人のよめる歌。

都にて山のはに見し月なれど波より出でて波にこそい  
れ

都入り

十六日 承平五年二月  
山崎 今の京都府乙訓  
郡大山崎村  
島坂 同郡向日町の西  
の長岡の上にあ  
る  
桂川 大堰川の下流  
末は淀川に入る  
飛鳥川 世の中は何か常  
なる飛鳥川昨日  
の淵ぞ今日は瀬  
になる(古今集)

十六日、今日の夕つ方、京へ上る序に見れば、山崎の店なる小櫃の  
繪も、糰餅の法螺の形も變らざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ。」  
とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて、人あるじしたり。  
必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸る時  
ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。  
夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。  
桂川月の明かきにぞわたる。人々の曰く、この川飛鳥川にあら

ねば、淵瀬さらに變らざりけり。といひて、ある人のよめる歌。

久方の月におひたる桂川そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる。

天雲のはるかなりつるかつら川そてをひでてでも渡りぬ  
るかな

又或人よめり。

かつら川わが心にも通はねどおなじ深さにながるべら  
なり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて、處々も  
見えず。京に入りたちて嬉し。家にいたりて門に入るに、月明  
かければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひな  
くぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も、荒れたるな

りけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預れるなり。さるは、便ごとくに物も絶えず得させたり。今宵かゝる事と、聲高にもものも言はず、いとほしく見ゆれど、志はせむとす。さて池めいてくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もありき。五年・六年のうち、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちに、猶悲しきに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌。

うまれしもかへらぬものを我が宿に小松のあるを見る  
が悲しき

とぞいへる。なほあかずやあらむ、またかくなむ。  
見し人を松のちとせに見ましかば、遠くかなしきわかれ  
せましや  
忘れがたく、くちをしきこと多かれど、えつくさず。とまれから  
まれ、とくやりてむ。(土佐日記)

九 うたひもの

神樂

劔

本

しろがねの 目貫の太刀を 下げ佩きて ならの都を  
ねるは誰が子ぞ ねるは誰が子ぞ

神樂  
宮中の御神樂の  
ときにうたふ歌  
歌詞は平安朝に  
定めたもの

ふる  
奈良縣大和國石  
上布留神社  
虎にのり古屋を  
こえて青淵にみ  
づちとり來む劍  
太刀もが  
(萬葉集)

末  
いそのかみ ふるやをとこの 太刀もがな 組の緒垂て  
て 宮路通はむ 宮路通はむ

養

本

養の ねたさうれたさや 御園生に參り來て 木の根を  
掘りはんで おさまさ 角折れぬ おさまさ 角折れぬ

木

ねたさうれたさや 御園生にまゐり來て 木の根を掘り  
はんで おさまさ 角折れぬ

催馬樂

飛鳥井

催馬樂  
古い民謡を平安  
朝になつて譜を  
定めて雅樂の中  
へ入れたもの

筆蹟

いけのすしき  
みきはには、な  
つのかげこそな  
かりけれ、こた  
かきまつをふく  
かせの、こゑも  
あきとそきこえ  
ぬる

今様  
平安朝に新に出  
來た一種の俗謡  
多くは七五四句

飛鳥井に 飛鳥井に やどりはすべし おけ かげもよ  
し かげもよし みもひも寒し みまくさもよし

老鼠

西寺の 老鼠 若鼠 おんもつんづ 袈裟つんづ 袈裟  
つんづ 法師に申さむ 師に申せ 法師に申さむ 師に  
申せ

いせれまき〜きみきま〜はまつのうけ〜うけ〜うけ〜  
りれ〜た〜ま〜れ〜せり〜あき〜  
こ〜〜〜

今様

法華

生死の大海ほとりなし 佛性眞如岸遠し

本版抄秘塵梁

朗詠

詩や賦の句を特別の節でうたふもの  
平安朝に盛に行はれた

元稹

唐の詩人  
白樂天の親友  
太和五年(一八三)歿

辰星

水星のこと  
水星は太陽と前後して出没する星

源順

平安朝の和漢學者  
後撰集の撰者  
梨壺五歌仙及び三十六歌仙の一  
永觀元年(一〇五五)卒  
年七十三

妙法蓮華は船筏

來世の衆生渡すべし

子供

遊をせむとや生まれけむ たはぶれせむとや生まれけむ  
遊ぶ子供の聲聞けば 我が身さへこそゆるがるれ

朗詠

螢

螢火亂れ飛んで秋已に近し

元稹

辰星早く没して夜初めて長し

松

源順

九夏三伏の暑き夕には竹錯午の風を含み  
玄冬素雪の寒き朝には松君子の徳を彰す

雪の山

小學國語讀本卷十、十七「雪の山」参照

清少納言

平安朝時代の女流文學者  
清原元輔の女  
一條天皇の皇后  
定子の方に仕へて寵遇された

一條天皇の正暦五年(六五五)十二月

その頃定子の方は御休養の御ため宮中からさがつて或御殿にいらつしやつた

所藏人所

一〇 雪の山

清少納言

しはすの十餘日のほどに、雪いと高う降りたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝ、いと多くおくを、女房おなじくは庭にまこと、の山を作らせ侍らむ。とて侍召して、仰ごとにてといへば、集りてつくるに、主殿司の人にて、御きよめに参りたるなども、皆よりにて、いと高く作りなす。宮づかさなど参り集りて言くはへ、ことにつくれば、所の衆三四人参りたる。主殿司の人も二十人ばかりになりけり。里なる侍召しにつかはしなどす。今日この山つくる人には、祿賜はすべし。雪山に参らざらむ人には、同じからずとめむ。などいへば、聞きつけたるは、惑ひまあるもあり、里遠きは、え告げやらす。作りはてつれば、宮づかさ召して、きぬ二ゆひとらせて、縁に投げいづるを、一つづつ取りによりて、を



宮  
一條天皇の皇后  
定子の方

がみつゝ、腰にさして皆まかぬ。袍ろほなど着たるは、かたへ去ら  
で、狩衣にてぞある。宮、これいつまでありなむ。と人々にのたま  
はするに、人々、十日はありなむ。人々、十餘日とをかあまりはありなむ。など、たゞ

踏フシクエ机



清少納言  
少口香  
言納少清  
(筆橋香口谷)

内、晦日までもあらじ。とのみ申すに、あまり遠くも申してけるか  
な。げにえしもさはあらざらむ。朔日などぞ申すべかりける

この頃のほどを、あるか  
ぎり申せば、宮いかにと  
問はせ給へば、清、正月の  
十五日までさぶらひな  
む。と申すを、御前にも、え  
さはあらじと思す。めり。  
女房などはすべて、年の

白山の観音

雪の國として知  
られてゐる加賀  
の國の白山にま  
つてある妙理  
権現社の觀世音  
菩薩

忠隆

源滿政の子

春宮

東宮御所  
當時の春宮は冷  
泉院第二の皇子  
居貞親王  
後御即位あつて  
三條天皇と申す

弘徽殿

清涼殿の北、七  
間四面  
皇后・女御の御  
在所

京極殿

藤原道長の邸  
當時土御門の南  
京極の西にあつ  
た

と、下には思へど、さはれさまでなくと、言ひそめてむことはとて、  
かたうあらがひつ。

二十日のほどに、雨など降れど、消ゆべくもなし。たけぞ少しお  
とりもてゆく。清、白山の観音、これ消やさせ給ふな。と祈るも物

ぐるほし。さてその山つくりたる日、式部しきぶ丞忠隆ちゆうたう御使にて参り  
たれば、しとねさしいだし、物などいふに、忠隆、けふ雪山つくらせ

給はぬ所なむなき。御前のつぼにも作らせ給へり。春宮弘徽

殿にも作らせ給へり。京極殿にも作らせ給へり。などいへば、

殿てん

にけるかなあまのうら

と傍なる人していはすれば、たびく、かたぶきて、忠隆、返しはえ  
つかうまつりけがたじ。あされたる御簾の前にて、人にをかた

何んかして二十五日  
このまゝ待ちつけま  
たいと祈るけれど  
七日をすまふし  
と人をやばいあか  
りやまを見まわめ  
と格も思ふ中に  
は俄かにまは空  
まてしや  
甚だ残念なり  
のまゆさる知らず  
に思ふ中に外人  
ほんにあつた  
うけ残心たなし

り侍らむとて立ちにき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし  
御前にきこしめして、いみじくよくとぞ思ひつらむとぞのたま  
はする。

雪山はつれなくて、年もかへりぬ。ついたちの日、又雪多くふり  
たるを、うれしくも降りつみたるかなと思ふに、宮、これはあいな  
はじめのをばおきて、今のをばかき棄てよと仰せらる。

雪山はつれなくて、年もかへりぬ。ついたちの日、又雪多くふり  
たるを、うれしくも降りつみたるかなと思ふに、宮、これはあいな  
はじめのをばおきて、今のをばかき棄てよと仰せらる。

雪の山はまことに越のにやあらむと見えて、消えげもなし。く  
ろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心ちして、  
いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど、人々、七日をだにえす  
ぐさじとなほいへば、いかでこれ見はてむと、人皆おもふほどに、  
俄に三日うちへ入らせ給ふべし。いみじうくちをし、この山

雪の山はまことに越のにやあらむと見えて、消えげもなし。く  
ろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心ちして、  
いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど、人々、七日をだにえす  
ぐさじとなほいへば、いかでこれ見はてむと、人皆おもふほどに、  
俄に三日うちへ入らせ給ふべし。いみじうくちをし、この山

宮の御前にも同様  
御せに

のはてを知らずなりなむことと、まめやかに思ふほどに、人もげ  
にゆかしかりつるものを、などいふ。御前にも仰せらる。同じ  
くいひあてて、御覽ぜさせむと思へるかひなければ、御物の具は  
こび、いみじうさわがしきにあはせて、木守といふ者の築土のほ  
どに廂さして居たるを、縁のもとに近く呼びよせて、積、この雪の  
山いみじくまもりて、わらはべなどに踏みちらさせこぼたせで、  
十五日までさぶらはせ。よく守りて、その日にあたれば、め  
でたき祿たまはせむとす。わたくしにも、いみじきよろこびい  
はむ。など語らひて、常に臺盤所の人、下衆などにくるゝを乞ひて、  
くだものや何やと、いと多く取らせたれば、うち笑みて、木守、いと  
やすきこと、たしかに守り侍らむ。わらはべなどぞのぼり侍ら  
む。といへば、積、それを制して、聞かざらむものは、事のよしを申せ。

おほやけ人  
公人  
禁中奉仕の下輩  
すまし  
須摩志女官  
御湯殿の掃除な  
どする女官  
をさめ  
宮中の雑役に奉  
仕する身分卑し  
き女

わらふだ  
圓座

などいひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日までさぶらひて出でぬ。そのほども、これがうしろめたきまゝに、おほやけ人すましをさめなどして絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどやりたれば、拜みつることなど、かへりて笑ひあへり。里にても、あくするすなはち、これを大事にして見せにやる。十日のほどには、使、五日まつばかりあり。といへば、うれしく思ふに、十三日の夜、雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらむと、いみじうくちをし。今ひと日ふた日もまちつけでと、よるも起きみてなげけば、聞く人も物ぐるほしと笑ふ。人の起きて行くに、やがて起きいで、下衆おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるをやりて見すれば、わらふだばかりになりて侍る。木守いとかしこう、わらはべも寄せで守りて、明日あさてまでもさ

ぶらひぬべし。木守祿賜はらむと申す。といへば、いみじくうれしく、いつしか明日にならば、いと疾う歌よみて、物に入れて参らせむと思ふも、いと心もとなうわびしう、まだくらきに、大きな折櫃などもたせて、遣、これにしろからむところ、ひたもの入れてもてこ。きたなげならむはかき捨てて、などいひくゝめて遣りたれば、いと疾くもたせてやりつる物ひきさげて、使はやう失せ侍りにけり。といふに、いとあさまし。をかしうよみいでて、人にも語り傳へさせむと、うめきずんじつる歌も、いとあさましく、かひなく、いかにしつるならむ。昨日さばかりありけむものを、夜のほどに消えぬらむこと。といひくんとすれば、使、木守が申しつるは、昨日いと暗うなるまで侍りき。祿を賜はらむと思ひつるものを、賜はらずなりぬること。と手をうちて申し侍りつる。といひ

給ふ  
四段  
下二段  
御歌の  
夜に  
御前  
侍る

さわぐに、うちより仰言ありて、寫さて雪は今日までありつや。とのたまはせられたれば、いとねたくくちをしけれど、昔年のうち朔日までだにあらじと人々啓し給へし、昨日の夕暮まで侍りしを、いほ結核と云ふ御前侍る。今日までは、あまりの事になむ。はひふふへ、かしのこしとなむ思ひ給ふる。と啓せさせ給へ。と聞えさせつ。さて二十日に参りたるにも、まづこの事を御前にてもいふ。皆消えつとて、蓋のかぎりひきさげてもて来りつる。帽子のやうにて、すなはちもて来りつるが、あさましかりし事物の蓋に小山うつくしう作りて、白き紙に歌いみじく書きてまゐらせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、宣かう心に入れて思ひける事をたがへたれば、罪得らむ。まこ

左近のつかさ  
左近衛府  
大内裏上東・陽明二門の間職の御曹司の東南にある

うへ  
上  
一條天皇

とには、四日の夕さり、侍どもやりて取りすてさせしぞ。かへりごと、に言ひあてたりしこそをかしかりしか。その翁いできて、いみじう手をすりて言ひけれど、仰言ぞ。かのよりきたらむ人にかうきかすな。さらば屋うちこぼたせむ。といひて、左近のつかさの、南の築土の外に皆取りすててけり。いと高くて、多くなむありつる。といふなりしかば、げに二十日まで待ちつけて、ようせずば今年の初雪にも降りそひなまし。うへにも聞しめして、いと思ひよりがたくあらがひたり。と殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌をかたれ。今はかく言ひあらはしつれば、同じこと勝ちたり。かたれなど、御前にもものたまはせ、人々ものたまへど、なにせむにか、さばかりの事を承りながら啓し侍らむ。など、まめやかに心うがれば、うへも渡らせ給ひて、まことに年

紫式部

平安朝時代の女  
流文學者  
藤原宣孝の妻  
一條天皇の中宮  
上東門院に仕ふ  
長元四年(充)  
歿

行平の中納言

在原行平  
業平の兄  
大宰權帥  
寛平五年(五三)  
卒

年七十六  
關吹きこゆる  
旅人は秋涼しく  
なりにけり關吹  
きこゆる須磨の  
浦風(續古今集)

善道  
ごろは多くの人なめりと見つるを、これにぞあやしく思ひし。な  
ど仰せらるゝに、いとつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。  
清いであはれ、いみじき世の中ぞかし。のちに降りつみたりし  
雪をうれしと思ひしを、宮それはあいなし。とて『かき捨てよ。』と仰  
せごと侍りし。と申せば、げに勝たせじとおぼしけるならむ。と、う  
へも笑はせおはします。(枕草子)

一一 須磨

紫式部

須磨には、いと心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中  
納言の、關吹きこゆる。といひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞え  
て、またなくあはれなるものは、かゝる處の秋なりけり。御前に  
いと人少にて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそば



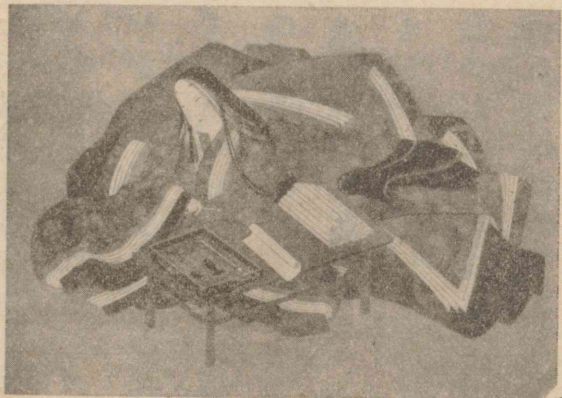
筆磨歌川多喜 磨

須磨の浦に舟あり来る  
月の影思ふれば  
秋は東にけり  
古今集

りつめわれ  
紫式部  
優美  
織細

ののの

御前に  
光源氏の



だてて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地

紫式部  
佐光起筆

して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少し搔鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾きさしたまひて、

こひわびてなく音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむと歌ひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれであいなう起きつゝ、鼻をしのびやかにかみわ

たす。

げにいかにも思ふらむ。

我が身ひとつにより、親兄弟かたとき立

離れがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへる  
 と思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふら  
 むと思せば、晝は何くれと戯言うち宣ひまぎらはし、徒然なるま  
 まに、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍しき様なる唐の  
 綾などに、さまざまの繪どもを畫がきすさび給へる屏風の面ど  
 もなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様  
 を遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゞず  
 まひ、二なく書集め給へり。このごろの上手にすめる千枝常則  
 などを召して、作繪つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。  
 懐かしうめでたき御有様に、世の物思忘れて、近う馴れつかうま  
 つるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。  
 前栽の花いろ／＼咲亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に

廊  
 結構  
 山々  
 建物

出で給ひて佇み給ふ御さまのゆゑ、しう清らなるに、所がらはま  
 してこの世のものとも見え給はず、白き綾のなよ／＼かなる紫苑  
 色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく打亂れ給へる。  
 御さまにて、釋迦牟尼佛弟子と名のりて、ゆる／＼かによみ給へる。  
 また世に知らずきこゆ。沖より舟どもの歌ひの、しりて漕ぎ  
 ゆくなども聞ゆ。ほのかに、唯小さき鳥の浮かべると見やらる  
 るも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲、楫の音にまがへるを、うち  
 ながめ給ひて、御涙のこぼるゝをかき拂ひ給へる御手つき、黒木  
 の御數珠に榮え給へり。

はつかりはこひしき人のつらなれや旅の空とぶ聲のか  
 なしき

巳の日  
三月上巳の節

彌生の朔日に出で來たる巳の日、今日なむかく思すことある人は御禊したまふべき。となまさかしき人の聞ゆれば、海面もゆかしくて出でたまふ。いとおろそかに軟障ばかりを引きめぐらして、この國に通ひける陰陽師召して祓せさせたまふ。船にことごとしき人形載せて流すを見たまふにも、よそへられて、知らざりし大海の原に流れ來てひとかたにやはものはかなしき

とて居たまへるさま、さる晴に出でて、言ふよしなく見えたまふ。海の面はうら／＼と風ぎわたりて、行方も知らぬに、來し方ゆく先思しつゞけられて、

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

君  
光源氏

と宣ふに、俄に風吹出でて、空もかきくれぬ。御祓もしはてず、立騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたゞしければ、皆歸りたまはむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろづ吹散らし、またなき風なり。波いと嚴しう立ち來て、人々の足をそらなり。海の面は袞を張りたらむ様に光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかゝる心地して、辛うじてたどり來て、かゝる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。あさましうめづらかなり。と惑ふに、なほやまず鳴りみちて、雨の脚あたる所通りぬべく、はらめき落つ。かくて世は盡きぬるにやと心ぼそく思ひ惑ふに、君はのどやかに經うち誦じておはす。暮れぬれば、雷少し鳴りやみて、風ぞ夜も吹く。多く立てつる願の力なるべし。今しばしかくだにあらば、浪にひかれて入りぬべか



親鸞

日野有範の長子  
淨土真宗の開祖  
弘長二年(九三三)  
寂

年九十

勅諡見真大師

西田幾多郎

哲學者  
文學博士  
京都帝國大學名譽教授  
明治三年(三五〇)  
加賀國(石川縣)金澤生

りけり。高潮といふものになむ、取りあへず人そこなはるゝとは聞けど、いとかゝることはまだ知らず。といひあへり。曉がた皆うち休みたり。君もいさゝか寐入りたまへれば、その様とも見えぬ人來て、など宮より召しあるには参りたまはぬ。とてたどり歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の龍王のいといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむづかしう、この住居堪へがたく思しなりぬ。(源氏物語)

一一 愚禿親鸞

西田幾多郎

余は真宗の家に生まれ、余の母は真宗の信者であるに拘らず、余自身は真宗の信者でもなければ、又真宗に就いて多く知るものでもない。たゞ上人が在世の時、自ら愚禿と稱し、この二字に重

後、我

コペルニクス

プロシヤの人

現在の天文学の開祖

(西暦一四七三—一五四三)

トレミ

西紀二世紀の前半ごろのアレキサンドリヤの人  
天文学者  
地理学者  
数学者

きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く聖人の人となりを表すと共に、真宗の教義を標榜し、兼ねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。

人間には智者もあり、愚者もあり、徳者もあり、不徳者もある。しかしいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての角の和が二直角に等しいといふには何の變りもなからう。たゞ翻身一回、この智、この徳を捨てた所に、新たな智を得、新たな徳を具へ、新たな生命に入ることができるのである。これが宗教の神髓である。宗教のことは世の所謂學問・知識と何等交渉もない。コペルニクスの地動説が眞理であらうが、トレミの天動説が眞理であらうが、さういふことはどちらでもよい。徳行の點から見

融禪師

法融

四祖大師に攝せられて牛頭山法といふ一派を開いた

牛頭山

支那江南の潤州にある禪寺

四祖大師

支那の禪宗第四世の祖道信



親 麓 聖 人  
(筆 花 耕 村 山)

も、宗教は自ら徳行を伴なひ來るものであらうが、また必ずしもこの兩者を同一視することは出來ぬ。

昔、融禪師が牛頭山の北巖に棲んでゐた時には、色々の鳥が花を啣んで供養したが、四祖大師に參じてからは、鳥が花を啣んで來なくなつたといふ話を聞いたことがある。宗教の智は智そのものを知り、宗教の徳は徳そのものを用ひるのである。三角形の幾何學的性質を究めるには、紙上の一傑も匹夫匹婦と同一である。たゞ眼は眼を見ることが出來ず、

筆蹟

入出二門、偈頌  
愚禿釋親鸞作  
无量壽經論一卷  
元魏天竺三藏  
善提留支譯  
婆藪盤豆菩薩  
造。婆藪盤豆是  
梵語。舊譯天親、  
此是訛。新譯世  
親。是爲正。

山にある者は山の全體を知ることが出來ぬ。この智、この徳の間に頭出頭没する者は、この智、この徳を知ることが出來ぬ。何人であつても、赤裸々たる自己の本體に立返り、一たび懸崖に手を撒して絶後に蘇つたものでなければ、これを知らることが出來ぬ。即ち深く愚禿の愚禿たる所以を味はひ得たもののみこれを知ることが出來るのである。聖人の愚禿はかくの如き意味の愚禿ではなからうか。他力といはず、自力といはず、一切の宗教はこの愚禿の二字を味はふに外ならぬのである。

入出二門偈頌  
愚禿釋親鸞作  
无量壽經論一卷  
元魏天竺三藏  
善提留支譯  
婆藪盤豆菩薩  
造。婆藪盤豆是  
梵語。舊譯天親、  
此是訛。新譯世  
親。是爲正。

親 麓 聖 人 筆

しかし、右の様にいへば、愚禿の二字は獨り眞宗に限つた譯でもない様であるが、眞宗は特にこの方面に着眼した宗教である、愚人、悪人を正因とした宗教である、絶對的愛、絶對的他力の宗教である。いかなる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀はたゞ汝の爲に我は粉骨碎身せり、といつて、これを迎へられるのが眞宗の本旨である。

終りに宗祖その人の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して、小島の主等が云々と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連なり、北國の隅に流されながら、若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。といつて、法を見て人を見なかつた親鸞聖人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤澎湃の間

吉水一門

東山の吉水で淨土宗を説いた源空即ち法然上人の門弟たち北國の隅に親鸞は承元元年(一六七)越後に流され五年目に赦された

法然

名は源空淨土宗の開祖京都東山吉水の草庵で念佛の教を説いた美作の人建曆二年(一七二)寂

三心

勸誡圓光大師年八十

四修

佛道修行の相長時修 懇重修 無餘修 無間修 深心 廻向發願心

に立つて動かざること巖の如き日蓮上人の意氣も壯なことは壯ではあるが、煙波渺茫、風靜かに波動かざる親鸞聖人の胸懷は、また何となく奥ゆかしいではないか。(思索と體驗)

一三 おもかげ

一文起請文

法

然

もろこしわが朝にもろくの智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず。又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらず。たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申せば疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には、別の子細候はず。但し三心、四修など申すことの候は、皆決定して、南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠りて候なり。この外に奥深きことを存

一三 おもかげ

二尊  
阿彌陀佛  
釋迦牟尼佛  
本願  
阿彌陀佛の四十  
八願  
その第十八願は  
念佛往生願  
道元

久我通親の子  
宋に留學すること  
五年  
歸朝後京都の建  
仁寺及び深草の  
興聖寺に居た  
越前永平寺の開  
山  
建長五年(一九三)  
寂  
年五十四  
勅謚承陽大師  
懷奘  
曹洞宗の高僧  
永平寺の初祖道  
元禪師の高弟  
永平寺第二代  
弘安三年(一九四)  
寂  
年八十三  
示して云く  
道元禪師の教示

せば、二尊の御隣にはづれ、**本願**にもれ候べし。念佛を信ぜん人  
は、たとひ一代の法をよくく、學すとも、一文不知の愚鈍の身に  
なして、尼入道の無智のとも  
がらに同じくして、智者の振  
舞をせずして、只一向に念佛  
すべし。(法然上人集)



法然上人  
史料編纂所藏

學道  
道元述  
懷奘受

放下して一向に佛法に入るべし。古人云く、百尺竿頭如何んか  
歩を進めんと。しかあれば、百尺の竿頭に上りて足を放たば死  
ぬべしと思うて、強く取附く心のあるなり。それを一步を進め

煩悩

よといふは、よもあしからじと思ひ切つて身命を放下するやう  
に、度世の業より始めて一身の活計に至るまで思ひすつべきな  
り。それを捨てざらん程  
は、いかに**頭燃**を拂うて學  
道するやうなりとも、道を  
得ることは叶ふべからざ  
るなり。唯思ひ切つて身  
心共に放下すべきなり。

(正法眼藏隨聞記)



道元自畫像  
(永平寺藏)

念佛  
親鸞述  
唯圓受

おのく十餘箇國の境を越えて、身命を顧みずして尋ね來らし

唯圓  
親鸞の弟子  
茨城縣(常陸國)  
東茨城郡河和田  
村泉慶寺の開基

一三 おもかげ

一〇

南都 奈良の東大寺及  
び興福寺  
北嶺 比叡山延暦寺

地獄に

日蓮の四箇格言  
念佛無間  
禪天魔  
眞言亡國  
律國賊

め給ふ御志、偏に往生極樂の道を問ひ聞かんが爲なり。然るに「念佛より外に往生の道をも存知し、又法文等をも知りたるらん」と心にくく思ひ召しておはしましては、はんべらんは、大きな誤なり。もし然らば、南都北嶺にもゆゝしき學匠たち多くおはせられて候なれば、彼の人々にも會ひ奉りて、往生の要よく聞かざるべきなり。親鸞におきては、唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべし」と、よき人の仰を蒙りて、信ずる外に別の子細なきなり。念佛は誠に淨土に生まるゝ種にてやはんべらん、又地獄に墮つべき業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人に賺されまゐらせて念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候。その故は自餘の行を勵みて佛になるべかりける身が、念佛を申して地獄にも墮ちて候はばこそ

善導

支那の隋・唐の  
問の高僧著し  
觀經の疏を著し  
淨土教の經格を  
創立した  
唐の高宗の開羅  
元年(西暦六四九)  
寂  
土牢御書  
文永八年(西暦一一三三)  
十月九日鎌倉の  
土牢にある高弟  
日蓮におくつた  
日蓮の書狀  
日蓮  
安房の人開祖  
立正安國論を幕  
府に上つて伊東  
に流され、龍口で  
斬られ、免れ、佐  
渡に流され、免れ、佐  
十一年赦され、佐  
歸一甲州身延山  
弘安五年(西暦一一三三)  
寂藏の池上で入  
寂六十一  
勅立正大師

「賺され奉りて」といふ後悔も候はめ。いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住處ぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言し給ふべからず。善導の御釋まことならば、法然の仰虚言ならんや。法然の仰まことならば、親鸞が申す旨までもて虚しかるべからず候歟。詮ずるところ、愚身の信心におきては此の如し。この上は念佛をとりて信じたてまつらんと、又棄てんと、面々の御はからひなり。(歎異鈔)

土牢御書

日蓮

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒きにつけても、牢の中の有様思ひやられて痛はしくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を色心二法共に遊ばしたる御身なれば、父母六親一切衆

殿

筑後房日朗  
文永八年土牢に  
入れられた  
後日蓮を佐渡に  
訪ふこと八回常  
に米を負うてい  
つた  
元應二年(九〇)  
寂  
年七十八  
天諸童子  
法華經安樂行品  
の語

生をも助け給ふべき御身なり。

法華經を餘人の讀み候は、口は



日蓮肖像(資料集)

かり言ばかりは讀めども心  
は讀まず、心は讀めども身に  
讀まず。色心二法共に遊ば  
されたるこそ貴く候へ。天  
諸童子、以爲給使、刀杖不加、毒  
不能害。と説かれて候へば別  
の事はあるべからず。牢を  
ばし出でさせ給ひ候はば、と  
くとかく來り給へ。見奉り、見  
え奉らん。恐々謹言。

(高祖遺文錄)

相馬御風

文學者  
名は昌治  
明治十六年(三四)  
三新潟縣糸魚川  
生

一四 大人と子供

相馬御風

あづさゆみ春さり來れば  
飯乞ふと里にいゆけば、  
里子ども道のちまたに  
手まりつく、我もまじりぬ、そが中に。  
ひ、ふ、み、よ、い、む、な  
汝がつけばあは歌ひ、  
あが歌へば汝がつきて、  
つきて、歌ひて、霞立つ  
ながき春日をくらしつるかも。  
これは私の最も好きな良寛和尚の歌の一つである。良寛は到  
る處で子どもたちと仲よしになつた。そして到る處で彼等と

共に遊んだ。子どもたちはまた到る處で良寛を歡び迎へた。そして到る處で彼と共に遊んだ。良寛ほど子どもと打ちとけ合つて遊び得た人は稀であらう。

子どもと共に遊ぶ——これくらゐ大人にとつてむづかしいことはなからう。單に子どもを遊ばせてやるだけではない。又單に子どもを相手に遊ぶだけでもない。子どもと共に遊ぶのである。互に一つに融け合つて遊び合ふのである。これは大變なことである。

どうかして子どもを喜ばせてやらう——かうした思はくやからひがあつては、却つて子供は遊ばない。どうかして子どもと遊びたいものだ、どうしたらよからう——そんな思案があつても子供は却つて遊んでくれない。不思議に、子どもはこちら

のぼんやりしてゐる時に、何等の成心もない時に、却つて打解けて遊びかゝつてくるものだ。子供のやうな純一無礙な心境を以ててなければ、子どもと共に遊ぶことが出来ない。子どもと共に遊び得る心は、萬物と共に遊び得る心だ。しかし、本當に子どもと共に遊び得る人は少い。

教育は相互生成でなければならぬ。教師が生徒を教へるだけが教育ではない。親が子を教へるだけが教育ではない。大人が子どもを教へるだけが教育ではない。教師も生徒から、親も子から、大人も子どもから、教育されなければならぬ、そして相互に伸びてゆく——それが本當の教育であると思ふ。童心の尊さが近來盛に説かれるやうになつて來た。喜ばしい

現象である。しかし、それは兒童の教育に於て童心を尊重するといふだけであつてはならない。同時にそれは教師なり、親なり、又一般の大人なりが、童心の感化をひねくれずに受容れることとでなければならぬ。

兒童を教育すると同時に、自己も亦兒童からの教育を十分に受容れて、共にく伸びゆく教師こそ、本當に私たちの要求する教師である。

四歳になる私の女の子をつれて海濱に遊んでゐた時、偶然彼女の小さな口から、かういふうれしい言葉を聞かされた。

「とうちやん、此の石もらつていきませう。」

彼の女は海濱の小石原から自分の氣に入つた美しい色の小石を三つ四つ拾ひ上げてかういつたのであつた。

海濱から石を貰つて行く——それは拾つて行くのでも、採つて行くのでもない——何といふ美しい心情の現れであらう。野から花を貰つて行く、樹から果實を貰つてたべる。「その心！その心！」私はさう獨で心に叫ばずにはゐられなかつた。「尊いわが子の心よ。父さんはおまへのさういふ心をおまへが現在持つてゐる程の眞實さで、これまで一度だつて持ち得たであらうか。」私はそんな風にも自らを省みないではゐられなかつた。家のまはりに草花の種を蒔く。芽が出るとそれを培ひ育てる。そして美しい花を咲かせて歡び眺める。つぎく人に來てはその花を眺め楽しんでくれる。それが



またむやみと嬉しい。見て楽しんでくれる人が多ければ、多いほど更に嬉しい。芽は育てれば育てるほど、育てる者にとりての喜びも増す。花の美は享樂してくれる人が多ければ多いほど、培ひ育てた人にとりて豊さを増すやうに感じられる。

土は耕してくださいと人間に頼みはしない、稻も麥も人間に育ててくださいと頼みはしない。耕し培ふのはむしろ人間の方からさせて貰つてゐるのである。人間がうける自然の恩恵は與へられたるそれではない。自然は強ひなどはしない。凡ては人間が貰はせていたゞいてゐるのである。本當に謙虚な心をもつ者のみが眞實に自然の恵にあづかることが出来る。さうしたひねくれずに自然の恩恵をいたゞく心がほしい。

エマーソン  
米國の評論家  
詩人  
(西曆一八三二—一八九六)

松村武雄  
神話學者  
文學博士  
浦和高等學校教授  
明治十七年(一五四)  
熊本縣熊本市  
生

自然に對し、世間に對し、また他人に對し、私たちはあまりに忖度が多すぎる。人が何かおもしろいものでも與へようとすると、いやにこましやくれたり、ひねくれたり、様子ぶつたりして、無邪氣にそれを受けない子どもが少くない。私たちにも丁度それに似たところが多分にある。

「太陽は大人にはその眼のみ照らすけれども、兒童にはその魂を照らす」とエマーソンは曰つた。それだ！それだ！（野を歩む者）

### 一五 子供の文學

松村武雄

想像力を基礎として考へると、人間には、自ら色々な型がある。視覺型・聽覺型・筋覺型といふのが、これである。眼から入つて來

る事物が耳から入つて來る事物よりも、その心像を形成し易い種類のものを視覺型といひ、これと反對に、耳から入つて來る事物が眼から入つて來る事物よりも、寧ろその心像を形成し易い種類のものを聽覺型といふ。そして、筋覺によつて最もよく事物の心像を形成し易い種類のものを筋覺型といふ。固よりかうした分類は、決して絶對的なものではなく、多くの人にあつては、これらをそれ／＼の度に於て併有する混合型をなしてゐることは、現時の實驗的研究によつて明らかにせられてゐるのであるが、しかし心像形成の様態の最も顯著なものを標準にすると、自ら上のやうな分類も出來るのである。大體、子供は大人に比してより強度に視覺型である。彼等が想像により造り出す心像は、視覺的心像が最も多いのを常とする。

言葉を換へて言へば、子供たちの想像力が最も容易に、且最も屢々生み出す心像は、具象的心像である。鹿とか熊とかいふものを考へる場合は、大人はよく言語心像を形づくりがちで、それが言葉として現れて來る傾向が強い。之に反して、子供は、こんな場合に、殆ど全く言語心像を形づくらないで、鹿や熊の具體的な形體がすぐに心に現れる。子供が屢々想像的伴侶を自分の身邊に持つてゐるのは、かういふ心理から來てゐる。彼等は誰もゐないところに、實際に友達があるかのやうな氣になつて、これと語り戯れ遊ぶ。これ子供の幻覺及び空想が、外部的實在、具體的な存在の形式をとつて、彼等の精神作用により空裡に投出せられるから、視覺型としての子供に頗るありがちの現象である。子供の想像力の特徴の一つは、實にこゝに存する。

次に子供の想像力は、それが産み出す想像心像の鮮明強烈なことを一つの特徴としてゐる。大人も、具體的心像を作り上げる場合が決して少いわけてはないが、しかし同じく具體的心像でも大人のとき子供のとでは、心像の鮮明性や心像形成の容易さの度に於て、よほど違つてゐる。子供は幻覺性が強く、すべてのものを具體化し生物化する。また對象の客觀的條件を超越して、おのが心に浮かぶ隨意の表象にそれを見立てる。英國の文豪ロバート・ルイズ・スチヴンスンは、その小品文「兒童の遊戲に於て、

「話が争鬭のことになると、子供は起ち上つて、劔として何物かを手に入れ、息が切れてしまふまで、一片の家具と烈しい勝負を試みなくてはならぬ。話が王様の恩赦狀を携へて馬を走

スチヴンスン  
英國近世の文學  
者  
詩人  
（西曆一八五〇—一八九

らせる段になると、子供は椅子に跨つて——あわたゞしさに顔が眞赤になるまで烈しく體を動かさねばならぬ。もし物語が斷崖の上の出來事を含んでゐるなら、子供は自ら箆筒によぢ登つて、そこからどしりと敷物の上に墜ちざるを得ない」といひ、

「また子供たちは、今一箇の椅子を城砦として烈しくこれを攻立ててゐるかと思ふと、やがてはこれを怪龍として、刀を持つて斬つてかゝる。と思ふと、忽ちそれは王子の臨席を迎へるための玉座に變化する」

といつてゐるのは、至言でなくてはならぬ。かくして子供たちは、その想像心像が非常に鮮明強烈であるがため、屢々、現實の世界と想像の世界との區別を混同して、有りもしないことを、さなが

ら有るもののやうに語り且行動する。

第三に、子供の想像力は、大人のそれに比して、より大きな合理化要求性を持つてゐる。これはちよつと考へると、一の逆説であり矛盾であるかのやうに思はれるが、よく考へると、當然の事である。大人の想像力は、經驗といふ大きな制約の下に束縛せられてゐる。従つて大人は、空想の夢幻境に遊んでゐるときでさへ、これは假象である。それが現實の世界ではなくて假象の世界であるとすれば、その世界では、どんな突飛な、不合理なことが起つても、毫も差支はない。いな現實世界の窮屈な合理性に飽いてゐる大人には、せめて想像の世界に於てでも、理窟を忘却しつくしたのである。だからそんな場合には、不合理を許容して、自ら積極的にこれを樂しむ氣持になる。これに反して子供

たちにとつては、想像の世界は假象の世界ではなくて、現實の世界の連続である。だからそこにどんな不思議なことが起るとしても、その不思議さには、それを裏づける理由がなくてはならぬ。子供は、どんな奇怪なことでも、それが實際の世界に有り得る、起り得ると想像してゐる。大人のやうに、假想の世界だから、そんなことが有り得る、起り得るとは考へてゐない。

だからさういふことが存在し生起するには、子供自身が納得するだけの原因や理由がなくてはならぬ。その原因や理由が、大人の心理からすれば、成立しないものであつてもかまはない。たとへば樹木がものを言ふとする。大人はこれを單に假象として物語の中に誘導するだけである。だから之を合理化する必要は少しも認めてゐない。之に反して子供には、樹木がもの

を言ふといふことは、假想ではない、實際の事實である。そして、彼等は自分たちが抱いてゐる萬有人感的信仰で、これを合理化してゐる。萬物が人間と同じやうなものであると想像し、だから樹木だつてものを言ふのだとするのである。子供の想像力の合理化要求性といふのは、かういふ心的活動を意味するのである。

子供の想像力の特徴は、上述のやうなものであるから、子供たちはその文學に於て、頻に不思議なもの、驚異すべきものを要求する。そして我々は適當にこの要求を充足してやるべき責務を持つてゐる。子供は、想像力が強烈であるから、その文學にまで想像的要素を持込んで、いやが上にこれを煽るのは、兒童教育上宜しくないことであるといふ見解の如きは、低級な常識から來

る愚論である。想像馳騁期にある子供たちの心靈が、その適當な糧としての想像的要素を適當に與へられるとき、いかにすすくと成長するか、また之に反してかういふ心的階段にある子供が想像的要素を含む文學から全く絶縁せられる時、いかに彼等が心的憂鬱に陥るであらうか。「熱してゐるときに鐵を打て」といふ英國の諺は、かういふ場合によく思ひあはすべき言葉である。

しかしそれと同時に、子供の文學に現る、不思議なもの、驚異すべきものは、どこまでも具體的なものでなくてはならぬ。大人にとつては、眼に見えぬもの、解釋のつかぬもの、空漠としてゐるものほど、神祕を感じさせ、驚異を感じさせる傾向を持つてゐるが、子供は、先に言つたやうに、想像力の上からいへば、視覺型が多

コレツヂ  
英國の詩人  
批評家  
（西曆一七七一—一八三三）

く、且想像上の事象を具體化し生物化する傾向が強い故、掴みどころのないやうな、漠然とした神祕の如きは、彼等の理解以上若しくは以外のものであり、従つて彼等に興味と愉悅とを與ふることが出來ぬ。更に又その不思議なもの、驚異すべきものは、具象的なものであると共に、さういふ事象の背後に、子供を納得させるだけの原因理由が潜んでゐなくてはならぬ。これは子供の想像力の一特徴たる合理化要求への自然の順應である。もしこの順應が閑却せられ若しくは無視せられると、その文學は子供の文學として必ず失敗する。魔法使ひがどんな不思議なことをしても、子供たちは、おとなしく若しくは喜んでこれを受容れる。なぜなら彼等の考に従へば、魔法使ひはどんなことでも爲し得るものであるからである。しかしコレツヂの「古海客

ペスタロツチ

十九世紀最大の

教育家

瑞西チューリッ

ヒに生る

小西重直

教育學者

文學博士

京都帝國大學名

譽教授

明治八年（三五）

山形縣生

の歌の如きは、決して子供の喜悅する文學ではない。この物語に現る、不思議なもの、驚異すべきものは、多くは原因や理由を超越した神祕性を帯びてゐるからである。言葉を換へて言へば、それは大人の想像力に訴へる文學で、子供に訴へる文學ではない。子供は、さういふ性質の不思議さを理解することが出來ぬ、従つて心的困惑に惱まされて、茫然たり悄然たるだけである。

〔兒童教育新論〕

### 一六 全人としてのペスタロツチ

小西重直

ペスタロツチの行迹思想をつら／＼考へて見るに、私の考へてゐる全人といふものは、實に此の人に於て見出されるやうに

隱者の夕暮  
格言的隨想錄  
(西曆一七〇著)

感ずるのである。信仰は吾人に安定の生活を與へるが、また同時に創造の生活を與へる。その創造の生活は、一面には信仰の發展、他面には文化價値の創造の根源と見ることが出来るであらう。信仰は人間と絶對とを橋渡しするものであつて、その中には有限と無限との二要素がある。有限の要素が含まれてゐるから、それを高めて、信仰それ自身を精進しなければならぬことになる。さうして見れば、信仰の精進も無限であるが、それが進むにつれて吾人は安定を與へられるのである。此の安定が精神の秩序を保つ所以である。ペスタロッチーは「隱者の夕暮」に於て

「神に對する信仰は、吾人の生活の靜平の源泉である。生活の靜平は内心の秩序の源泉である。内心の秩序は吾人の種々

の力が亂れずに活用されてゐる源泉である。」

といつてゐるが、これは單に彼の認識的思想ではなく、彼自身の生活、彼自身の行迹の上に表現せられてゐるやうに思はれる。彼の行迹、彼の思想の根柢には神に對する固き信仰があつて、その源泉となつてゐた。それにその當時の瑞西國の下層社會の人々の不幸なる有様といふ實際の事實に觸れて、彼の思想、彼の行迹が養はれて來たのであらう。而も彼の努力せる目標としては、神への信仰の生活を一步たりとも庶民に植ゑつけようとするにあつた。何となれば信仰のなきところには、人間の意識は靜平秩序を得ないからである。彼がブルグドルフの學校を廢せねばならなくなつて、親しき小兒たちに別れるに當り、その告別の辭に於て、子供たちに、

ブルドルフ  
瑞西國  
ベルネ市の近く  
の町

「ほんたうの神の子となつてくれ。」  
といふことを力強く話してゐるのを見て、此の事を知ることが出来る。



ベラスロツチ

かくの如く、彼にとつては、人間の救済と言ふことが、己の終生の願望であり、最後の目標であつたが、而もその根柢には、固き信仰を養はねばならぬといふ強い信念が横たはり、彼はまた常にこゝに意を用ひてゐたのであつた。或はまた、彼自身が固き信仰をもつてゐて、彼の生活は此の信仰の力によつて動かされてゐたのだ。といつてもよい。彼がその最愛の妻アンナの死する際に、彼女

アンナ  
一七六七年嫁し  
一八一五年十二  
月逝く  
年七十七

の小さい胸に十字架を押當てて、

「此の十字架のためにこそ我々は働いて來たのだ。」

といつたあの敬虔な態度。この態度こそ當時の彼の宗教的情操を如實に物語るものであつて、實にそれは涙ぐましいほどである。

かゝる信仰の生活からして、彼は一切の人間、特に不幸なる人々や、悪しく教育されてゐる人々に對して敬愛の態度を以て臨んだのである。かくの如き人々を彼は敬愛を以て取扱つて、決して粗末にせず、一步たりとも眞の人間性に近づかしたいと欲したのである。かういふ彼の教育態度こそ實に全人としての態度でなくて何であらうか。

彼は最初社會救済の目的をもつて農業を始め、新しき農耕を試



み、また貧民を救済しようとして試み、或は貧民學校なども設けたが、何れも完成しなかつた。また彼がなした學校教育は、實に新しき試みであつて、永久の眞理を吾人に教へてはくれるが、しかし彼自身も之を自覺してゐたやうに、また吾人も之を認めざるを得ざるやうに、彼の仕事は決して完成されたものではなかつた。故に完成をもつて全人の意味とすれば、こゝに當て嵌らない。完成若しくは完全とは、出來上つたといふ意味であつて、私は此の意味を「全人」の意味から排除してゐる。ベスタロッチーに於て、心の満足は、荒海の中で泳いでゐることであつて、岸に泳ぎついて休むことは、彼には苦痛であつた。即ち彼は苦しみ悩みのうちに、寧ろ安息を感じたのであつた。換言すれば彼は創造の過程に價値を認め、創造の完成を考へてはゐなかつたと見る

一八二〇年の  
新年  
新年講話

ことが出来る。このことは特に一千八百十年の新年に於て、彼が自分の學舎で話した一節を見ればわかる。即ち

「人間は岩の隙間から水の滴りを汲出す。これが人間の力である。その水は、岩角に衝きあたり、再び源に還つて流れぬといふこともあらう。而もその水がだんくく岩をやぶり、石を流し、漸次に一つの大きい流となつてゆくといふこと、これが神の力である。」

といつてゐる。これを見ると、彼は、水がその流を完成するのは神の力であると考へてゐるのである。これ、畢竟完成は神の世界に在つて、人間の世界にはない、人間は一步々と進む、或はベスタロッチーの語によれば、荒い浪の中に泳いでゐるといふことが全人の創造の生命といふものではなからうか。

彼は常に

「生活は陶冶する。」

といつてゐた。而して彼自身の生活、彼自身の事業に於て、此の語を實現せしむることを努めてゐたが、實に彼自身の生活は、永久に人間を陶冶する力をもつてゐると私は信ずる。即ち彼は永久なる創造的生命を有つてゐるものである。といふことが出來よう。(ベスタロッチー研究)

鹿子木員信

哲學者

九州帝國大學教

授

明治十七年(三四)

巴東京生

### 一七 日本文化の優秀性

鹿子木員信

國風と民俗とを異にせる異國に發生した文化を吸收攝取するに當つては、我等は、先づ古き日本文化の崇高と優秀とに十分目覺めなければならぬ。我等はともすれば、皮相低級な歐米崇拜

の濁流に浸されて、過ぎし日の日本文化の偉大を忘却し去りがちである。こゝに我等は、暫く足を停めて、獨得な日本文化とその精神とを、我等の自覺の焦點に於て見ねばならぬ。

日本の藝術は、實に日本國民性の驚くべき高き氣品と深さと美はしさとを物語るものである。藝術といふ範圍に於ては、或は日本の文化は世界最高の文化とはいひ得ないとしても、少くとも、たしかに世界最高の文化の一つであるとはいひ得るものである。

余は決してヨーロッパの文化と藝術とに對して冷淡無關心なものではない。寧ろ、一面、ヨーロッパの文化と藝術とに對して共鳴と愛着と尊敬とを禁じ得ないものである。が、それら總べてのヨーロッパの偉大な藝術を以てしても、なほ我等の心には、

依然満たされない或ものが残る。何であるか。それは深き心、魂の奥底深く包まれた圓滿自足の心である。自ら以外、何等他に求むるところなき心、自らの力と徳と美との美はしさを他に誇示表現するをさへ蔑む心、否、この蔑む心をさへ脱却超越せる心、この絶對的に内なる、内に満ち内に憩ふ内的世界こそ、ヨーロッパの藝術に絶無といへないまでも、極めて稀なる魂の領域である。この奥深き心、たとひ全世界は毀れ砕け焼け落ち去つても微動だにせぬ心、既に強さそのものを超越せる心の豊けさ、静けさ——この絶對に内なる世界の藝術的表現こそ、實に日本の藝術に独自の特色を附與するものである。その指すところは常に深遠幽玄の内なる心、その内には、一撃にしてこの世界をも打碎くべき力を湛へ、しかもこれを外に向かつて示すことなく、

滿を持して放たぬ力、その恐しきまでに強き力の上に坐して、しかも山湖のごとく靜かに動かぬ心、かくの如き心こそ、日本の藝術をして天下一品たらしむるところのものである。



（藏堂月三良奈） 薩善光月

をさながらに呼吸する彫刻があらう。若しくは、バロック・ロココの全作品を探しても、どこに我が室町時代以降漸次盛になつたあの數奇幽雅な什寶を求め得よう。または、世界のあらゆる

バロック  
十七世紀の初に  
發達した建築様  
式  
ロココ  
十八世紀の初バ  
ロック式につい  
で佛國に起つた  
藝術様式

武庫を尋ねても、どこに現代まで傳はれる幾多の名工の鍛へた日本の刀、日本の鏝に匹敵するものがあらう。次に日本の宗教について深くその姿を探つて見たい。言ふまでもなく、日本の藝術は、その多くの原動力を、宗教特に佛教に仰ぐものである。而して日本國民は極めて宗教的なる國民である。日本國民を以て宗教心に乏しきものと速斷する見解が無いではない。しかし、その永き歴史を顧みる時、日本國民は、何れの國民に比べても、決して宗教心に於て見劣りするものではない。否、我等の宗教心は、或方向に向かつては極めて勁烈である。我が國民的宗教たる神社崇敬について見よ。いづれの文化國に、今日尙その本來固有の國民的宗教を保持し、主張し、これをして暗黙の間に自國の守たらしめてゐる國家があらう

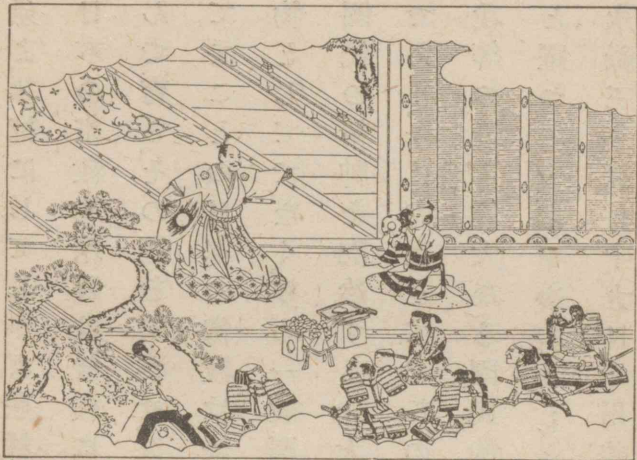
か。あの日本の神々の精神を表現してゐる神社の建築を仰ぎ見よ、單純にしてしかも莊嚴、自然と頭が下るではないか。この日本の宗教的精神は、後代に至つて、佛教といふ偉大な柱にからんで育ち、その花を咲かせ、又その實を結んだものである。而してまことの日本の佛教は決して一つの宗派、一つの宗團の專有物としてでなく、寧ろ一般國民的生活に浸潤して、冥々のうちに國民の精神を陶冶する一大精神的感化力として生きて來たのであり、今日尙生きてゐるのである。少くとも或時代に於ては、我等の最も偉大なる國民的英雄の心膽氣魄のうちに、紅の血潮と躍つて大事を決行せしめる原動力であつたのである。

永祿三年五月十九日、今川義元は二萬に餘る大軍を率ゐて、潮の如く織田信長の清洲の城に迫つて來た。侍臣は皆、信長に籠城

永祿三年  
正親町天皇の御  
代(三三〇)  
清洲の城  
愛知縣西春井郡  
清洲にあつた織  
田信長の居城

防禦を勧めた。しかも信長は斷乎としてこれを斥け、先君の遺

誠に從ふと言切つた。そしてその城を出て敵を境外に邀へ討たうと決意し、起つて、敦盛の舞を舞ひ終つて、主從僅かに六騎、清洲の城をとび出した。この時の光景を描いた祐筆太田牛一の「この時信長、敦盛の舞を遊ばし候。人間五十年、化天の内を比ぶれば夢幻の如くなり。一度生を得て、滅せぬ者の有るべきか。」と仰せられ、御物具召され、立ち



信長敦盛の舞を舞ふ  
(繪本太閤記)

化天

化樂天の略  
天上界の一  
こゝに生まれる  
ものは自ら五塵  
を化し自ら娛樂  
し壽八千歲に至  
るといふ

べきか。」とて、『法螺吹け、具足よこせ。』と仰せられ、御物具召され、立ち

ながら御食事を参り、御兜をめし候うて、御出陣なされ。』といふ文章は、實に幽玄な形而上學的思想と端的な英雄的斷行とが經緯となつて輝く、世にも珍しきものといふべきである。

この敘述をして意味深長ならしむるものは、實に、二つの相異なる思想の綜合、しかも單なる概念の上に於ける綜合でなく、寧ろ生ける行爲の上に於ける綜合統一に存する。「人間五十年、化天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生を得て滅せぬ者のあるべきか。」とは、要するに諸行無常の理を謠へるもの、そは必ずしもやまとごころにのみ特有のものではなく、寧ろ印度傳來の、東洋共通の思想である。否、諸行の無常と萬法の流轉とを説く者は、何も東洋の思想にのみ限りはしない。希臘の最も高貴な思想家ヘラクレイトスの哲學は、實に萬法流轉を喝破せるもので

ヘラクレイトス  
ギリシヤの哲學  
者  
(西曆前三頃一  
前四五頃)

あつた。日本の精神を獨得なるものたらしめ、截然としてこれを爾餘一切の東洋厭世隱遁の思想より峻別せしめた例は、實に信長をして、あの桶狭間の危急存亡の秋に臨んで、法螺吹け、具足よこせと仰せられ、御物具めされ、立ちながら御食事を參り、御兜をめし候うて御出陣なされ……といふ英雄的果敢斷行の結論に導かしめたことに於て見られる。これが健闘を辭さない最高の精神である。「生者必滅、會者定離」の思想よりしては、未だ必ずしも直ちにこの英雄的行爲は生まれて來ない。否、印度・支那の場合に於て、この思想の生むところは、寧ろ避難遁世の苟安の隱士、乃至は保身に巧なる所謂明哲の類である。然るに、我にあつては、この人生を夢幻と觀、我等の一生を蜉蝣の如くはかなきものと見る、その幽遠高踏脱俗の思想そのものより、立ちながら

食事し、甲冑を帶して敵の千軍萬馬の眞直中に突撃奮闘する乾坤一擲の英雄的斷行の泉を汲んで來てゐるのである。實にこの綜合の精神こそ、日本精神をして世界獨得のものたらしむるものである。

我が日本の文化にあつて、諸行無常の厭世超脫の思想は、單に山林の間に自適する出家沙門のものたるのみでなく、一般に國民精神の間に浸潤する思想であり、しかもその思想は、決して、往々シヤム・ビルマに見るが如き、國民的精神を優柔軟弱に導くが如きものと墮せず、寧ろ却つて高邁なる英雄的行爲の源となつてゐるのである。これまた我が英雄的行藏をして、往々歐米の偉人英雄に見るが如く、煩惱執着、飽くまで地を匍うて塵を吸ふの嫌なからしめ、常に高貴高邁の風あらしむる所以である。而し

シヤム  
暹羅  
印度支那半島の  
中部にある一獨  
立國  
ビルマ  
緬甸  
印度支那半島の  
西部にある一地  
英領

てこの精神こそ實に我等が大乗的精神と稱するところのものである。概念的構成としての大乗佛教はいざ知らず、眞の具體的に生くる大乗的精神は、實に獨得に、日本精神の産むところであつたのである。

我等はこの高邁なる精神を、最も善く三浦道寸の最期と、その辭世とに見ることが出来る。三浦道寸、北條早雲と戦ひ、その最後の據りどころ三浦三崎の油壺の海城にたてこもり、力戦苦闘、矢盡き刀折れて、遂にその老の皺腹を搔切るに當り、彼は心靜かに歌つた――



三浦道寸の最期  
(北條五代記)

三浦道寸  
相模國三浦の大  
名  
北條早雲  
名は長氏  
通稱伊勢新九郎  
小田原北條氏の  
初代  
永正十六年(三七  
〇)卒  
年八十八

討つものも討たるゝものもかはらけよくだけて後はもとの土くれ

敵も味方も、討つ者も討たるゝ者も、元來一味一樣の、隔てなきものであるならば、しかく敵味方に偏執して力戦苦闘するの要はなかつたかも知れぬ。しかも日本のつはものは、この認識の上、尙その幻の世に生くる限り、悪戦苦闘を辭さないのである。しかも同時に、その心の奥底に、敵味方の差別と特殊と流轉とに超越せる一味平等の絶對者に參じて、劔戟の響のうち、鮮血流るゝ敗戦の裡に、親族郎黨の討たるゝ一族没落の日に、尙あの油壺の水の清らかに澄めるが如く、またあの岬角に聳ゆる老松の清韻の如く、よく超邁清爽なることを得たのである。

我が日本の獨得なる精神は、唐天竺から渡來した佛教によつて

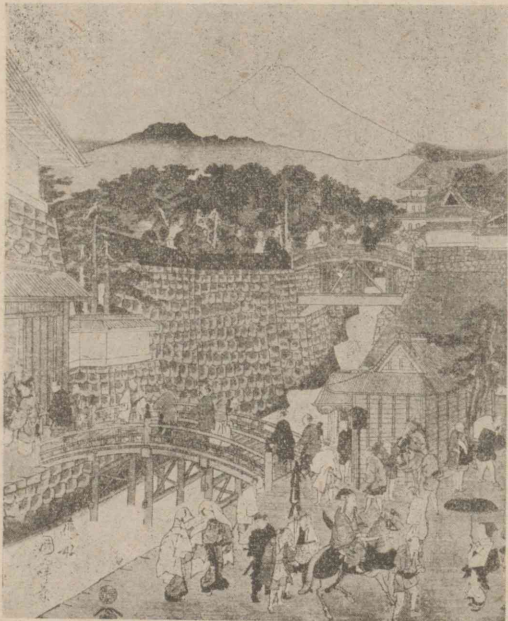
法然 名は源空 淨土宗の開祖 美作(岡山縣)の人 建曆二年(八七〇) 寂年八十 勅諡圓光大師 親鸞 淨土眞宗の開祖 京都の人 弘長二年(九三三) 寂年九十 勅諡見眞大師 榮西 臨濟宗の開祖 備中(岡山縣)の人 建保三年(八七五) 寂年七十五 勅諡千光國師 道元 曹洞宗の開祖 京都の人 建長五年(九三三) 寂年五十四 勅諡承陽大師 日蓮 日蓮宗の開祖 安房(千葉縣)の人

はぐくまれ、しかも同時にその佛教を大乘佛教、否我等の魂の血肉のうちにくる大乘的精神にまで陶冶し得たのである。我が鎌倉時代に、法然、親鸞、榮西、道元、日蓮の出でたのは、決して偶然では無い。而してこの優美にして雄健、雄健にして幽玄なる精神は、同時にまた世界的に高貴な文學を生んでゐる。源氏物語の洗煉された典雅、巧緻な文學、平家物語の驚くべき深き宗教的形而上學的背景を持つ悲壯、凄艶な史詩、日蓮の遒勁無比な豫言者的文字等は、世界におけるこの種の文學の何れに比べても遜色なきものである。世間往々日本の藝術作品を評して、纖細巧緻の小品となすものがある。いかにもそれが無いではない。しかし思うても見よ、世界何れの國に、十分に藝術的價値を體現して、しかもその大の、

弘安五年(九四〇) 寂年六十一 勅諡立正大師

運慶 鎌倉佛師の祖 後鳥羽・順徳兩天皇の頭の人 ミカエラン、ゼロ 伊太利の彫刻家 畫家 建築家 (西曆一四七五—一五六一)

奈良の大佛に及ぶものがあらう。今日現存せるものは大佛殿も大佛の頭部も奈良朝當時のものではない、しかも尙、これを仰ぎ瞻る時、我等はその偉大なる藝術の美に打たれざるを得ないではないか。若しくはまたかの平安朝末期、鎌倉初期の生んだ力強い運慶の作品を記憶にのぼせて見よ、余はその力に於て、またその大いさに於て、ミカエラン、ゼロに劣る所を見ない。徳川時代の初期に出來た江戸城を見よ、かほど



江戸城 (歌川國輝筆)



までに雄大、かほどまでに大規模な城郭は、世界中を探しても、恐らくまたとないであらう。

余は、こゝに、これ以上、日本文化の高貴と偉大とに深入りする暇を持たぬ。余が日本文化の種々相とその特色とを語つた所以は、實に讀者自ら立留つて、暫くその祖先健闘の跡を追懐し、日本文化の實に天下一品なる事實を、その胸裏に牢記せられんことを冀ふに外ならぬ。

約七十年前、我等日本國民が、始めて類を異にする西洋文化に面接したのは、實にかくの如き天下一品の文化、或方向に於ては殆ど完全の域に達せる文化を掲げてであつた。然るに西洋文化に面接するや、否や、我等は、在來の儘では日本國の存在を完うし得ざるを認識しないでは居られなかつた。かくしてこゝに單

なる「存在」のための高貴なる文化の變革、精神的文化の「物質化」は始つた。これをしも悲劇といはずして、何をか悲劇といはう。それは實に「物質」の祭壇への「精神」の犠牲である。しかし力強きやまと心は、この物質の犠牲を通して、今や方に、より力強き精神の更生期に進みつゝある。日本精神は、今や再び「大死」一番大悟徹底を経験せんとしつゝある。要するに我等の悲劇は唯悲劇に終るものでない。それは實にダンテの意味における神曲である。

(やまとこゝろと獨逸精神)

ダンテ  
伊太利の大詩人  
(西曆三三五—一三  
四)

# 師範國文 第一部用 卷九終

新版師範國文第一部用卷九

昭和十二年十一月十五日 印刷  
 昭和十二年十一月十八日 發行  
 昭和十三年三月十日 修正再版印刷  
 昭和十三年三月十三日 修正再版發行

定一卷二、三四、五六、七八  
 價一卷七、八、九、十  
 金六十錢  
 金五十七錢  
 金五十五錢

文部省檢定

師範學校國語教科書用 昭和十三年三月十五日



編者 吉田彌平  
 補訂者 石井庄司  
 發行者 東京市神田區神保町一丁目五番地 上原才一郎  
 發行所 東京市神田區神保町一丁目五番地 光風館書店  
 (電話) 神田三〇八七番  
 (振替口座) 東京三二七番  
 印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社  
 根本力三

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接に御注文被下候はば直に御送本可致候

